平城京右京北辺三坊五・六坪
（HJG18 次）

－令和 4 年度発掘調査報告書－

2024

公益財団法人　元興寺文化財研究所

平城京右京北辺三坊五・六坪
（HJG18 次）

－令和 4 年度発掘調査報告書－

2024

公益財団法人　元興寺文化財研究所

溝 SD010 出土「修理□」線刻丸瓦（奈良文化財研究所撮影）

築地塀 SA060 と溝 SD010（北西から）

築地塀 SA060 と溝 SD010 西側壁面土層断面（東から）

序

平城京右京の北西には、一条北大路の北側に張り出した区画の存在が指摘され、この区画は「平城京北辺坊」と呼ばれています。この北辺坊をめぐっては、古くから論争の対象となり、その存否論争を嚆矢とし、現在では遺存地割の検討などから京北条里や西大寺寺域との空間的、時間的関係性、さらにその範囲をめぐってはさまざまな議論が展開されています。

北辺坊に関しては、遺存地割のほかに「大和国添下郡京北班田図」や「西大寺敷地図」、さらには「西大寺与秋篠寺堺相論絵図」など西大寺・秋篠寺の相論の際に作成された鎌倉時代の豊富な絵図が知られています。これにより地割の検討や発掘調査によって検出された条坊区画との対比が可能であることもあり、多角的に検討が進められています。

このうち、発掘調査によって検出される条坊関連遺構は、位置や年代などの具体的な検討を可能とする点で重要な位置を占めています。

今回の調査では、この北辺坊で築地塀の痕跡とそれに伴う東西方向の溝を検出しました。溝からは一括で埋没したと考えられる瓦片がまとまって出土し、丸瓦の一つには「修理□」という文字が線刻されていました。

令外官である「修理司」は西大寺・西隆寺造営とも関係が深く、両寺の造営と北辺坊との関係、京北条里と北辺坊の関係、修理司と北辺坊の関係を考える上できわめて重要な成果であるといえます。

最後になりましたが、今回の発掘調査に際して多大なるご協力を頂きました開発事業者様、調整・指導をいただきました奈良県、奈良市教育委員会をはじめ、関係各位に深く感謝の意を表したいと思います。

令和6年3月31日

公益財団法人　元興寺文化財研究所
理事長　辻村泰善

例言

1. 本書は奈良市西大寺北町１丁目において、宅地造成に先立ち実施した発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 調査地は奈良県奈良市西大寺北町１丁目 388-1、388-4、388-7 に所在し、事業面積 1827.48㎡、建築面積 798.77㎡のうち、調査面積は 452.00㎡である。
3. 調査は株式会社 an・vert から委託を受けた公益財団法人元興寺文化財研究所が行い、令和４年６月６日～同年７月 26 日を現地調査、同年７月 27 日～令和６年３月 31 日を整理期間とした。
4. 発掘調査は江浦　洋（公益財団法人元興寺文化財研究所）が担当し、村田裕介・武田浩子（同）、中村文洋・矢野定治郎（奈良大学大学院）、北畠俊・田中稔（大阪大谷大学大学院）、上野善則・松田青空・池本優衣（奈良大学）が補佐した（所属は当時）。
5. 調査地の座標および基準点測量は、公益財団法人元興寺文化財研究所が実施し、株式会社文化財サービスが分担した。座標の表記は世界測地系である。
6. 発掘調査における土工部門は株式会社島田組が担当した。
7. 遺構写真撮影は江浦が、遺物の写真撮影は大久保治（公益財団法人元興寺文化財研究所）が行った。線刻丸瓦に関しては奈良文化財研究所の協力のもと、飯田ゆりあ（奈良文化財研究所）が撮影を行い、画像の提供を受けた。
8. 出土遺物の実測および浄書、ないし図面等の整理作業は仲井光代、武田、芝 幹、山本知佳（公益財団法人元興寺文化財研究所）が行った。
9. 本書に使用した土器・瓦の分類、編年、年代観については以下の文献を参照した。本文中で触れる分類名、年代標記はこれらに依拠している。

   古代の土器研究会 1992『古代の土器（１）都城の土器集成』

   古代の土器研究会 1993『古代の土器（２）都城の土器集成』

   神野恵・森川実 2010「土器類」『図説平城京事典』柊風舎

   奈良国立文化財研究所 1976『平城宮発掘調査報告書Ⅶ』

   奈良国立文化財研究所 1982『平城宮発掘調査報告書Ⅺ』

   奈良国立文化財研究所他 1996『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』

   神野恵「都城の製塩土器」2013『塩の生産・流通と官衙・集落』（『第 16 回古代官衙・集落研究会報告書』）

   奈良市教育委員会 1999『史跡平城京朱雀大路跡－発掘調査・整備事業報告』

   西大寺 1990『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』
10. 発掘調査および整理報告書作成にかかる費用については、株式会社 an・vert が全額負担した。
11. 当該調査において出土した遺物、実測図、写真は奈良市教育委員会において保管している。
12. 本書の執筆に関わる SD010 出土の丸瓦・平瓦の分類および数量等の基礎データ作成は池本が行い、江浦がこれを補った。執筆は第３章第３節２を池本と江浦が、これ以外は江浦が行った。本書の編集は江浦が行い、芝がこれを補佐した。

13. 発掘調査および報告書に際しては以下の方々からのご助言、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げたい（敬称略、順不同）。

奈良市教育委員会、奈良県文化財保存課、奈良文化財研究所、秋山成人、飯田ゆりあ、池田裕英、上椙英之、垣中健志、久保邦江、桑田訓也、後藤信義、坂井秀弥、狭川真一、佐藤亜聖、鹿野　翌、中島和彦、中西克宏、馬場　基、原田憲二郎、安井宣也、山本祥隆

目次

第１章　調査に至る経緯と調査体制 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査体制 …… 1
　第３節　調査の経過（調査日誌抄） …… 2
第２章　周辺環境と既往の調査 …… 4
　第１節　遺跡の立地と環境 …… 4
　第２節　周辺の既往調査 …… 5
第３章　調査の成果 …… 8
　第１節　基本層序と遺構面の認定 …… 8
　第２節　古墳時代の遺構と遺物 …… 17
　　1. 遺構 …… 17
　　2. 遺物 …… 19
　第３節　奈良時代の遺構と遺物 …… 20
　　1. 遺構 …… 20
　　2. 遺物 …… 23
第４章　調査のまとめ - 要点の整理と課題 …… 39
　　1. 北辺坊との関係について …… 39
　　2.「修理□」と書かれた丸瓦について …… 40
　　3. 西大寺との関係について …… 41

表目次

表１　丸瓦・平瓦の推定個体数と比率 …… 35
表２　他遺跡および文献史料にみる丸瓦と平瓦の比率 …… 35
表３・４　報告遺物一覧 …… 47・48
表５～８　検出遺構および出土遺物一覧 …… 49～52

図版目次

図 1　調査地位置図（S=1/25,000：国土地理院『奈良』S=1/25,000 を改変）…… 4
図 2　調査地周辺の地形（『平城京条坊総合地図』を改変）…… 5
図 3　今回の調査地と既往の調査地（S= 1 /2,000）（『平城京条坊総合地図』を改変）…… 6
図 4　壁面土層断面図（1）（S=1/40）…… 9
図 5　壁面土層断面図（2）（S=1/40）…… 11
図 6　壁面土層断面図（3）（S=1/40）…… 13
図 7　壁面土層断面図（4）（S=1/40）…… 15
図 8　全体平面図（S=1/150）…… 16
図 9　SB030 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）…… 18
図 10　SB070 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）…… 18
図 11　SA040 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）…… 19
図 12　SA060 関連遺構平面・断面図（S=1/40）…… 21
図 13　SD010 法面検出ピット土層断面図（S=1/40）…… 22
図 14　SA060 下層検出遺構平面・土層断面図（S=1/40）…… 23
図 15　SK020 土層断面図（S=1/40）…… 23
図 16　丸瓦・平瓦の側面形状分類…… 24
図 17　SD010 出土丸瓦実測図（1）（S=1/2・1/4）…… 25
図 18　SD010 出土丸瓦実測図（2）（S=1/4）…… 26
図 19　SD010 出土平瓦実測図（1）（S=1/4）…… 28
図 20　SD010 出土平瓦実測図（2）（S=1/4）…… 29
図 21　SD010 出土平瓦実測図（3）（S=1/4）…… 30
図 22　SD010 出土平瓦実測図（4）（S=1/4）…… 31
図 23　SD010 出土平瓦実測図（5）（S=1/4）…… 32
図 24　SD010 出土平瓦実測図（6）（S=1/4）…… 33
図 25　SD010 出土熨斗瓦実測図（S=1/4）…… 36
図 26　SD010 出土面戸瓦・塼実測図（S=1/4）…… 37
図 27　遺構・包含層等出土遺物実測図（S=1/3）…… 38
図 28　今回の調査区と一条北大路…… 39
図 29　今回の調査区と西大寺・条坊区画との関係…… 42
図 30　検出遺構配置略図（S=1/200）…… 46

写真目次

写真１　重機掘削作業……3
写真２　遺構掘削作業……3
写真３　記録作業 ……3

写真図版目次

巻頭図版１
溝 SD010 出土「修理□」線刻丸瓦
（奈良文化財研究所撮影）
巻頭図版２
築地塀 SA060 と溝 SD010（北西から）
築地塀 SA060 と溝 SD010 西側壁面土層断面（東から）

図版１
調査前風景（北東から）
重機掘削状況（北東から）
図版２
調査地全景（西から）
調査地北東部（西から）
図版３
調査地西壁土層断面（東から）
調査地東壁土層断面（西から）
図版４
調査地南壁西半部土層断面（北東から）
調査地北壁西半部土層断面（南東から）
図版５
SB030（北から）
SB030 柱穴断面
図版６
SA060・SD010 検出状況（東から）
SD010 瓦出土状況（北から）
図版７
SD010 瓦出土状況（南から）
SD010 瓦出土状況（南東から）
図版８
SD010 法面ピット列検出状況（東から）
SA060 遺構検出状況（北から）
図版９
SA060 上面（西から）
SA060 上面（北から）
図版 10
SA060 全景（南東から）
SA060 西側壁面土層断面（東から）
図版 11
SP152 土層断面（南から）
SP151 土層断面（南から）
図版 12
SP153 土層断面（東から）
SP158 土層断面（東から）
図版 13
SP160 遺物出土状況（東から）
SD050 土層断面（南から）
図版 14
SA060 完掘状況（西から）
SA060 下層検出遺構（北から）
図版 15 ～ 22
SD010 出土遺物
図版 23
SD010、SK020 出土遺物
図版 24
SP160、包含層ほか出土遺物

第１章　調査に至る経緯と調査体制

第１節　調査に至る経緯

令和３年 11 月 25 日付けで株式会社 an・vert より、奈良市西大寺北町１丁目で行う共同住宅新築に伴う埋蔵文化財発掘調査の届出が提出された。

奈良県文化財保存課は令和４年１月４日付けで奈良市教育委員会を通じて発掘調査の実施を指示した。これを受けて奈良市教育委員会は発掘調査の実施に向けた協議を開始したが、工期等を勘案した結果、公共機関による発掘調査は困難と判断されたため、公益財団法人元興寺文化財研究所へ調査を依頼することとなった。

令和４年５月 19 日に奈良県文化財保存課より発掘調査の依頼を受けた公益財団法人元興寺文化財研究所は、同年５月 31 日に発掘調査届出を提出のうえ、同年５月 31 日付けで平城京右京北辺三坊五・六坪発掘調査整理報告書作成業務に係る委託契約を株式会社 an・vert と締結、同年６月６日より現地調査を開始した。

現地調査は令和４年７月 26 日に終了し、その後すみやかに整理・報告書作成業務に移行した。現地調査から報告書作成に至る間、株式会社 an・vert の全面的な支援・協力があった。また、奈良県文化財保存課、奈良市教育委員会からの適切なご指導を賜った結果、調査・整理作業を無事に終了することができた。関係各位に感謝する次第である。

第２節　調査体制

発掘調査並びに整理・報告書作成は以下の体制で実施した。

（発掘調査）

調査指導：奈良県文化財保存課・奈良市教育委員会

調査主体：公益財団法人元興寺文化財研究所

理 事 長　辻村泰善

所　　長　田邉征夫

事務局長　江島和哉

総合文化財センター長　山田哲也

文化財調査修復研究グループ

総括マネージャー　雨森久晃

主　務　　村田裕介

研究員　　坂本　俊

研究員　　瀬戸哲也

技　師　　江浦　洋（現地調査担当）

現地作業員：株式会社島田組

測　　量：公益財団法人元興寺文化財研究所・株式会社文化財サービス

（整理報告）

調査指導：奈良県文化財保存課・奈良市教育委員会

調査主体：公益財団法人元興寺文化財研究所

理 事 長　辻村泰善

所　　長　田邉征夫

事務局長　江島和哉

総合文化財センター長　山田哲也

文化財調査修復研究グループ

総括マネージャー　雨森久晃

主　務　　村田裕介

研究員　　坂本　俊

研究員　　瀬戸哲也

技　師　　江浦　洋（整理報告担当）

第３節　調査の経過（調査日誌抄）

令和４年

６月６日（月）　重機、機材搬入。重機掘削を開始。

６月７日（火）　重機掘削。包含層から軒丸瓦、鉄滓が出土。

６月８日（水）　重機掘削。東壁土層断面（南半）、南壁土層断面（東半）精査、写真撮影。奈良市久保邦江、中島和彦氏来訪。

６月９日（木）　重機掘削。東半部遺構検出。掘立柱建物跡検出。

６月13日（月）　重機掘削。南壁Ｄ層断面（西半）精査、写真撮影。大阪府立弥生文化博物館鹿野塁氏来訪。

６月14日（火）　雨天のため現場図面の点検、整理を行う。

６月15日（水）　重機掘削終了。北壁土層断面精査、写真撮影。

６月16日（木）　遺構検出作業。西壁土層断面精査、写真撮影。大阪大谷大学狭川真一氏来訪。

６月17日（金）　遺構検出作業。南半谷部の包含層掘削。座標杭打設作業。滋賀県立大学佐藤亜聖氏来訪。

６月20日（月）　南半谷部の包含層掘削。遺構略図作成。南壁土層断面図作成。

６月21日（火）　雨天のため掘削作業は中止。天候の回復を待って南壁土層断面図を作成。

６月22日（水）　雨天のため掘削作業は中止。天候の回復を待って北・西壁土層断面図を作成。

６月23日（木）　東壁土層断面図作成。SD010 掘削。

６月24日（金）　北東突出部、北・西壁土層断面写真撮影。SD010 土層断面写真撮影。

６月28日（火）　SD010 掘削、瓦片がまとまって出土。

６月30日（木）　全景写真。ラジコンヘリによる空中写真。ドローンによる空測作業。SD010 瓦出土状況実測。

７月１日（金）　SB030 柱穴の土層断面写真撮影、実測。SD010 出土瓦取り上げ。

７月４日（月）　雨天のため現場図面の点検、整理を行う。

７月５日（火）　雨天のため現場図面の点検、整理を行う。
７月６日（水）　SD010 肩部からピット列を検出。
７月７日（木）　検出遺構の掘削、写真撮影、実測作業。田邉所長現場視察。
７月８日（金）　SA060 精査、遺構検出。近鉄大和西大寺駅北側で安倍晋三元首相襲撃事件発生、現場前道路が規制される。
７月 11 日（月）　SA060 精査、遺構掘削。大阪大谷大学狭川真一氏、東大阪市中西克宏氏、大阪府文化財センター坂井秀弥氏来訪。
７月 12 日（火）　雨天のため現場図面の点検、整理を行う。
７月 13 日（水）　SA060 精査。上面で検出したピットの調査、完掘状況写真撮影。
７月 15 日（金）　SA060 地山面精査、遺構検出、掘削、記録作業。
７月 19 日（火）　雨天のため作業中止、排水作業。現場図面の点検、整理を行う。
７月 20 日（水）　北東突出部の壁面の精査、写真撮影、実測作業。大阪府文化財センター後藤信義氏来訪。
７月 21 日（木）　SD010 出土瓦の取り上げ。
７月 22 日（金）　現場撤収準備。
７月 26 日（火）　調査完了状況写真撮影。現場撤収完了。

令和５年

６月１日（木）　整理作業の過程でSD010から出土した丸瓦凸面に文字が書かれていることを発見。
６月７日（水）　文字瓦を奈良文化財研究所都城発掘調査部史料研究室に持ち込み、判読作業を実施。「修理□」と読める可能性が高いことが判明。
７月４日（火）　公益財団法人元興寺文化財研究所において、「修理□」と書かれた瓦の出土に関する報道提供を実施する。
７月 15 日（土）　奈良県立橿原考古学研究所附属博物館で開催された速報展「大和を掘る 38」に文字瓦ほか６点を出陳。会期は９月３日（日）まで。

写真１　重機掘削作業

写真２　遺構掘削作業

写真３　記録作業

第２章　周辺環境と既往の調査

第１節　遺跡の立地と環境

調査地は奈良市西大寺北町１丁目 388-1、388-4、388-7 に所在し、平城京の条坊復原では右京北辺三坊五坪と六坪の坪境付近に該当する。

地理的には奈良盆地の北西側、秋篠川と富雄川に挟まれた西ノ京丘陵の東麓に位置する。したがって、大局的には西から東に向かって傾斜しており、今回の調査地が位置する坪では西端と東端では約 4m の比高差がみられる。また、微視的にみると今回の調査地の南側では斜めに走る地割が傾斜変換点と対応して小規模な谷状の地形となっている。

今回の調査地の遺構面の標高は最も高い北西隅で 77.0m、最も低い南東隅では 75.9m を測る。この傾斜は西大寺周辺において、「基本的には北から南及び西から東への傾斜を持つ」という地形環境と対応する（西大寺 1990）。また、西側約 90m に位置する市 322 次調査では標高は北西隅で約 80.5m、南東隅では約 79.3m で、今回の調査地との間の勾配は約 2.9% となる（奈良市の調査は市 322 次とする。以下同じ）。西大寺境内周辺での傾斜は 0.9% であることを考えると、かなりの斜面地形であるといえる。ちなみに、西大寺境内における地山面の標高は 72.5 ～ 74.7m である。

図１　調査地位置図（S=1/25,000：国土地理院「奈良」S=1/25,000 を改変）

調査地の西側約 30m には、鎌倉時代の西大寺敷地図や西大寺と秋篠寺の相論絵図などの西大寺古絵図群にも描かれている「十五所神社」が現存している。西大寺が所蔵する鎌倉時代（13 世紀）の複数の敷地図では調査地が位置する右京北辺三坊六坪を「寺中」とし、三×五町の寺域（伽藍）が記されている。また、「西大寺与秋篠寺堺相論絵図」（正安 4（1302）年）には一条北大路の北側の右京北辺三坊三・六・七坪を囲むように土塁状の描写がみられ、大樹で表現される「十五所神社」との関係からみると、絵図で表現された土塁状の高まりは今回の調査で検出した築地の痕跡であったと考えられる。

第２節　周辺の既往調査

調査地周辺では、小規模な試掘や調査が多いものの、西側約 90m の地点における右京北辺三坊七・八坪の調査（市 322 次）は比較的大きく、古墳時代から平安時代にかけての建物跡などが検出されている（奈良市 1996）。

奈良時代の建物である SB10・11 は柱間 10 尺（3m）の長大な建物であり、一般的な住宅とは一線を画している。また、平安時代の遺構は東西に 2 棟が並び、炉跡とともに鞴羽口や鉄滓が出土するなど、工房関連の遺構群と考えられる。調査地は北辺坊の南一行目（七坪）と二行目（八坪）の坪境にあたり、調査地の西 60m には条間小路の地割と考えられる水田区画が遺存し、その延長線が調査地内を通ることとなるが、ここでは条坊道路の明確な痕跡は確認されていない。ただ、調査地の北端部では、調査区内で検出された南北棟建物 SB10 の北側妻までには約 7m の空閑地が存在することが指摘されており、遺存地割は条坊道路ではなく、道路北辺の位置に合わせて作られた区画施設を反映したものである可能

図２　調査地周辺の地形（『平城京条坊総合地図』を改変）

性も指摘されている（井上 2005）。なお、井上和人氏は同論考の中で奈良時代の建物群については西大寺との関連、平安時代の遺構群については秋篠寺の寺院造営整備に関連するものと考えている。

また、今回の調査地と同じ坪内では奈良市による小規模な調査が行われており、市 618 次調査および市 728 次調査では奈良時代の遺構が検出されている。前者では一間分を検出したのみであるが、一辺 1m の柱穴が柱間 3.6m で検出されており、大型建物である可能性も指摘されている（奈良市 2011）。後者では 1 棟の南北棟建物を部分的に検出し、同時に検出した土坑からは製塩土器がまとまって出土している（奈良市 2021）。このほか、条坊遺構と考えられる溝が検出された市 430 次調査がある（奈良市 2001）。この調査区の南側で検出した東西溝 SD02 は、溝幅は 6.4m 以上、深さは約 1.5m である。遺物は上層から奈良～室町時代の土器と鉄滓、中層から古墳～室町時代の土器が出土している。下層の出土土器は小片であるが、平安時代以前のものと考えられ、掘られた時期は不明であるが、少なくとも室町時代まで溝が利用され、その間に改修を行なったものとされる。報告では北側で検出した SX01 から出土した瓦類を含めて築地所用瓦であると想定し、この溝が一条北大路の北側築地塀に伴う雨落溝の位置に当たるとしている。

なお、この溝の評価については、これを一条北大路北側溝と評価する研究者も多い（井上 2005・佐藤 2005）。北辺坊については計算上の条坊復元に対して遺存地割が北側にずれる傾向がみられ、これは北辺坊南一行目と二行目の坪境にあたる今回の調査地周辺においても同様である。

こうした歴史的・地形的環境ならびに既往の調査成果を踏まえ、今回の発掘調査では①平城京北辺坊における条坊遺構の追求と土地利用の様相について、西大寺との関連も含めて解明する、②西大寺古絵図群に描写された周辺地域の状況と考古学的な調査成果との関連性を明らかとする、③未だ定見をみない平城京北辺坊の実態について、考古学的な調査成果によって基礎データを蓄積する、ことを課題とした。

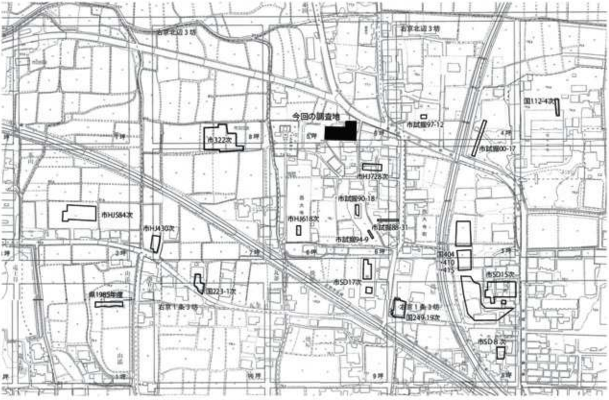


図 3　今回の調査地と既往の調査地（S= 1 /2,000）（『平城京条坊総合地図』を改変）

《参考文献》
井上和人 2005「平城京右京北辺坊考」『西大寺古絵図の世界』東京大学出版会
佐藤亜聖 2005「発掘資料からみた西大寺荘園絵図群」『西大寺古絵図の世界』東京大学出版会
西大寺 1990『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』
奈良市教育委員会 1996『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成７年度 』
奈良市教育委員会 2001『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 11 年度』
奈良市教育委員会 2011『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 20（2008）年度』
奈良市教育委員会 2021『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 30（2018）年度』
奈良国立文化財研究所 1984『平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告 』
奈良文化財研究所 2003『平城京条坊総合地図』（『創立 50 周年記念奈良文化財研究所史料第 60 冊』）

第３章　調査の成果

第１節　基本層序と遺構面の認定

今回の調査は、周辺の調査成果を受けて、奈良時代の遺構面調査を対象として着手した。なお、遺構検出面は一部を除いて地山面である。

地形的には東西方向では西が高く、東に緩やかに傾斜している。また、南北では南側で浅い谷状の地形を検出しており、南に向かって緩やかに下降する地形を呈している。地山面の標高は最も高い北西隅で 77.0m、最も低い南東隅では 75.9m を測る。

北壁（図 4、図版 4）

最上層は２～ 3m の駐車場造成に伴う分厚い盛土層であり、1990 年のコーヒー缶が出土している。その下面には層厚 10 ～ 30cm の土壌化が著しい旧作土層、層厚 5 ～ 10cm の床土と考えられるシルト層と続く。その下層には、西側では瓦や土器の細片を多量に含む層厚約 20cm の包含層があり、その下面が地山面となる。西端では畔状の人為的な盛土がみられ、これは棚田状の水田の段差の部分であったと考えられる。

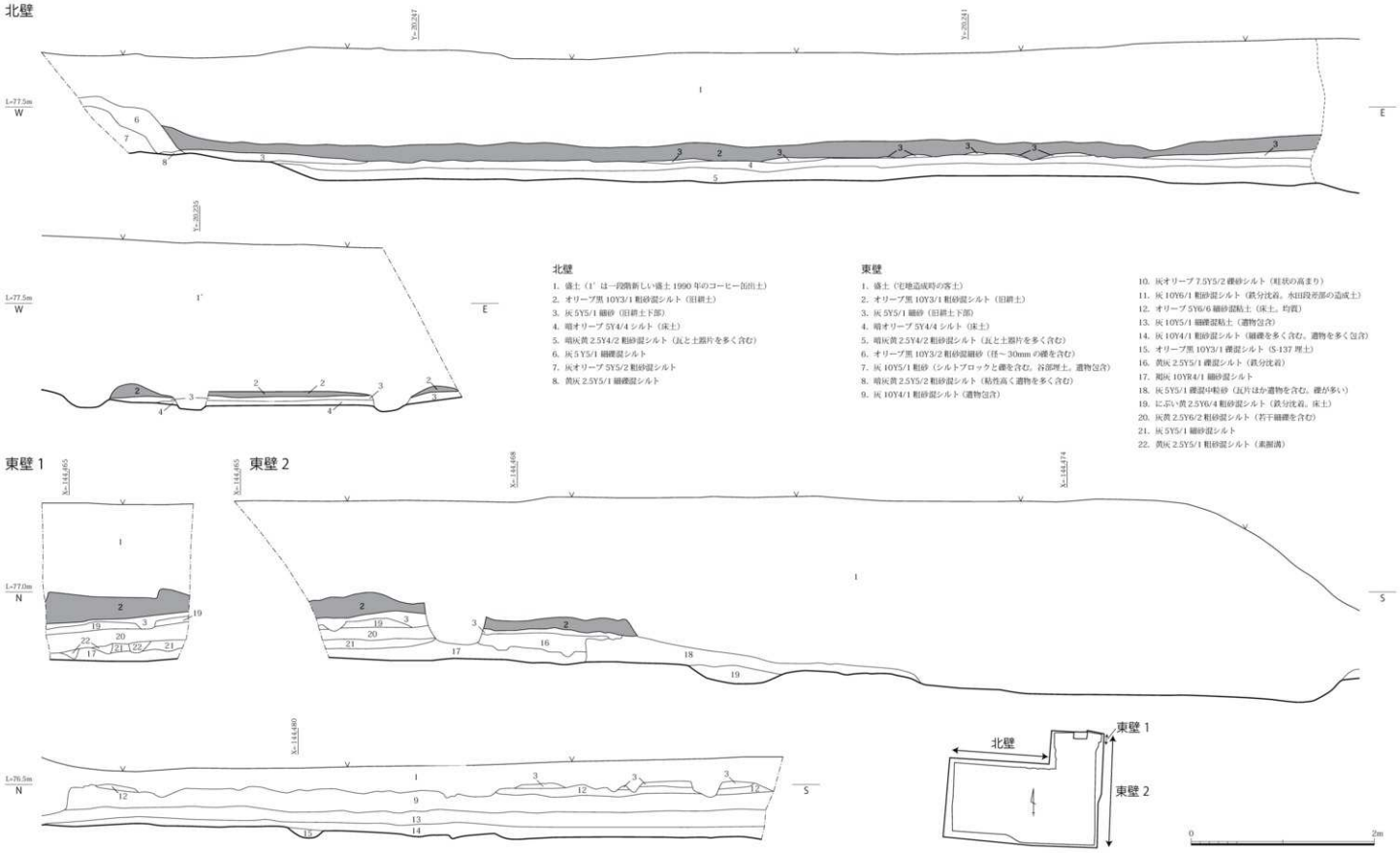
一部では大規模な盛土造成時の掘削が地山にまで及んでいる部分もあるが、基本的には盛土層の下面には旧耕土層が残っており、現代の宅地造成などに伴う開発前の景観は傾斜地に造成された棚田状の水田景観であったことが看取される。なお、地山面では古墳時代にさかのぼると考えられる掘立柱建物跡が検出されたことを考えると、この地山平坦面の造成は部分的であった可能性はあるものの、古代以前にさかのぼるものと考えられる。

突出部北壁（図 6）

突出部北壁も基本的には同様であるが、ここでは旧耕土の下層に古い段階の耕土と考えられる土壌層とそれに対応する床土層が堆重している。出土遺物が乏しく年代は特定できないものの、上下層との関係でみれば、中世段階の水田耕作土であると考えられる。その下面が奈良時代の SD010 となるが、東側では旧耕土が一段低くなっており、古い段階に上面が削平されていた状況が窺われる。SA060 とともに傾斜地を水田化するにあたって、切土された部分に該当すると考えられる。

東壁（図 4、図版 3）

最上層は分厚い盛土層であり、北側では２～ 4m、南側では約 50cm の盛土が全体を覆う。中ほどでは盛土造成時の掘削が地山面まで及んでおり、盛土層直下が地山面となる。北側では旧作土層以下が残り、1m ほどの間に重層的な堆積がみられ、複数の土壌化した水平の土層が観察される。一部では土壌層の下面から素掘溝と考えられる遺構断面が確認できることから中世段階の水田作土層の堆重であると考えられる。一方、南側では盛土造成時に旧作土層を除去して盛土に置き換えている状況が看取される。下層は南側に向かって緩やかに下降する谷状地形を層厚 20 ～ 30cm の土層が重なって埋めている。各層は細礫や粗砂が混じる粘土～シルト層であり、奈良時代の瓦や土器の細片が多く混じっている。当該層からはごくわずかであるが、瓦器椀の高台部分の破片が出土しており、中世段階に谷部を埋めた整地層であると考えられる。



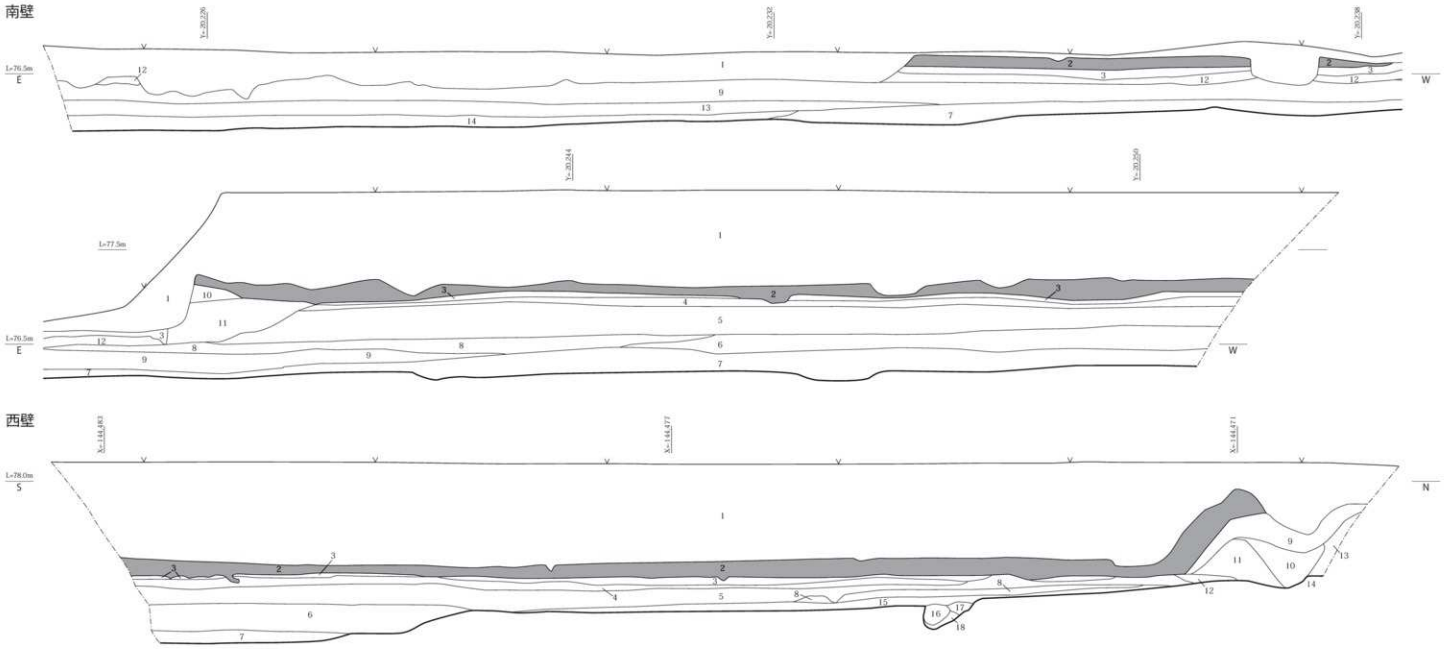
北壁

1. 盛土（1′は一段階新しい盛土 1990 年のコーピー缶出土）
2. オリーブ黒 10Y3/1 粗砂混シルト（旧耕土）
3. 灰 5Y5/1 細砂（旧耕土下部）
4. 暗オリーブ 5Y4/4 シルト（床土）
5. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混シルト（灰と土器片を多く含む）
6. 灰 5Y5/1 細礫混シルト
7. 灰オリーブ 5Y5/2 粗砂混シルト
8. 黄灰 2.5Y5/1 細礫混シルト

東壁

1. 盛土（宅地造成時の客土）
2. オリーブ黒 10Y3/1 粗砂混シルト（旧耕土）
3. 灰 5Y5/1 細砂（旧耕土下部）
4. 暗オリーブ 5Y4/4 シルト（床土）
5. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混シルト（灰と土器片を多く含む）
6. オリーブ黒 10Y3/2 粗砂混細砂（径～ 30mm の礫を含む）
7. 灰 10Y5/1 粗砂（シルトブロックと礫を含む。谷部埋土。遺物包含）
8. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂混シルト（粘性高く遺物を多く含む）
9. 灰 10Y4/1 粗砂混シルト（遺物包含）
10. 灰オリーブ 7.5Y5/2 礫砂シルト（畦状の高まり）
11. 灰 10Y6/1 粗砂混シルト（鉄分沈着。水田段差部の造成土）
12. オリーブ 5Y6/6 細砂混粘土（床土。均質）
13. 灰 10Y5/1 細礫混粘土（遺物包含）
14. 灰 10Y4/1 粗砂混シルト（細礫を多く含む。遺物を多く包含）
15. オリーブ黒 10Y3/1 礫混シルト（S-137 埋土）
16. 黄灰 2.5Y5/1 礫混シルト（鉄分沈着）
17. 褐灰 10YR4/1 細砂混シルト
18. 灰 5Y5/1 礫混中粗砂（瓦片はか遺物を含む。礫が多い）
19. にぶい黄 2.5Y6/4 粗砂混シルト（鉄分沈着。床土）
20. 黄灰 2.5Y6/2 粗砂混シルト（若干細礫を含む）
21. 灰 5Y5/1 細砂混シルト
22. 黄灰 2.5Y5/1 粗砂混シルト（未掘溝）

図４　壁面土層断面図（1）（S=1/40）



南壁

1. 盛土（宅地造成時の客土）
2. オリーブ黒 10Y3/1 粗砂混シルト（旧耕土）
3. 灰 5Y5/1 細砂（旧耕土下部）
4. 暗オリーブ 5Y4/4 シルト（床土）
5. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混シルト（瓦と土器片を多く含む）
6. オリーブ黒 10Y3/2 粗砂混細砂（径～ 30mm の礫を含む）
7. 灰 10Y5/1 粗砂（シルトブロックと礫を含む。谷部埋土。遺物包含）
8. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂混シルト（粘性高く遺物を多く含む）
9. 灰 10Y4/1 粗砂混シルト（遺物包含）
10. 灰オリーブ 7.5Y5/2 礫砂シルト（畦状の高まり）
11. 灰 10Y6/1 粗砂混シルト（鉄分沈着。水田段差部の造成土）
12. オリーブ 5Y6/6 細砂混粘土（床土。均質）
13. 灰 10Y5/1 細礫混粘土（遺物包含）
14. 灰 10Y4/1 粗砂混シルト（細礫を多く含む。遺物を多く包含）

西壁

1. 盛土（宅地造成時の客土）
2. オリーブ黒 10Y3/1 粗砂混シルト（旧耕土）
3. 灰 5Y5/1 細砂（旧耕土下部）
4. 暗オリーブ 5Y4/4 シルト（床土）
5. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混シルト（瓦・土器片を多く含む）
6. オリーブ黒 10Y3/2 粗砂混シルト（径～ 30mm の礫を含む）
7. 灰 10Y5/1 粗砂（シルトブロック・礫を含む。谷部埋土。遺物包含）
8. 浅黄 2.5Y7/4 粘土（均質）
9. 灰 5Y5/1 細礫混シルト
10. 灰 5Y4/1 細礫混シルト
11. 灰 7.5Y5/1 シルト（オリーブ黄 5Y6/3 粘土ブロックを含む）
12. 黄灰 2.5Y5/1 細礫混シルト（瓦片を多く含む）
13. 灰オリーブ 5Y5/2 粗砂混シルト
14. 明黄褐 2.5Y7/6 礫混粗砂（地山）
15. にぶい黄 2.5Y6/4 粘土（鉄分沈着）
16. オリーブ灰 2.5GY5/1 粗砂混シルト
17. 灰 7.5Y5/1 中粒砂（灰 10Y5/1 粘土ブロックを含む）
18. 緑灰 7.5GY5/1 粘土（中粒砂を含む）

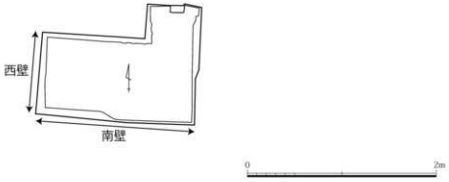
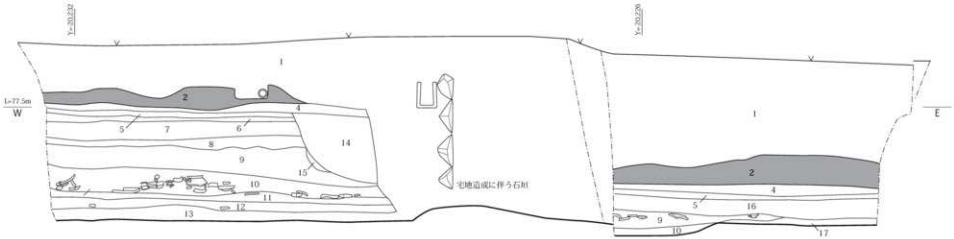


図５　壁面土層断面図（2）（S=1/40）

突出部北壁



1. 盛土（宅地造成時の客土）
2. オリーブ黒 10Y3/1 粗砂混シルト（旧耕土）
3. 灰 5Y5/1 細砂（旧耕土下部）
4. 灰 5Y6/1 細砂（旧耕土下部）
5. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混シルト（上部に鉄分沈着。床土）
6. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混細砂（～ 10mm の礫を若干含む。若干土壌化）
7. 暗灰黄 2.5Y4/2 細礫混細砂（～ 10mm の礫を若干含む。若干土壌化）
8. オリーブ褐 2.5Y4/3 粗砂混シルト（鉄分沈着。8 の耕土に対応する床土か）
9. 黄灰 2.5Y4/1 細礫混シルト（SD010 埋土）
10. 灰 10Y4/1 細砂混粘土（瓦片を多く含む）
11. 黄灰 2.5Y5/1 粗砂混シルト（瓦片を若干含む）
12. 灰黄 2.5Y6/2 粗砂混粘土
13. 灰 7.5Y6/1 粗砂混粘土
14. 黄灰 2.5Y5/1 粗砂混シルト
15. にぶい黄 2.5Y6/3 細砂混シルト（浅黄 2.5Y7/4 粘土ブロックを含む）
16. 灰黄 2.5Y6/2 粗砂混シルト（若干細礫を含む）
17. 褐灰 10YR4/1 細礫混シルト

図 6　壁面土層断面図（3）（S=1/40）

南壁（図 5、図版 4）

最上層は調査区全体を覆う分厚い盛土層である。盛土層は下層の水田面の区画と対応して層厚に差があり、西半では約 2m の分厚い盛土がなされるが、東側では数 cm ほどの部分もあり、厚い部分でも 80cm ほどである。その下面に土壌化の著しい旧作土層、床土層が続くが、東側では旧作土層は盛土に置き換えられている。その下層は谷状地形の埋土で 4 層前後に分層できるが、いずれも細礫や粗砂、奈良時代の瓦や土器の細片を多く含む。東壁土層断面で触れたとおり、瓦器椀片を含むことから中世段階の整地層であると考えられる。

西壁（図 5、図版 3）

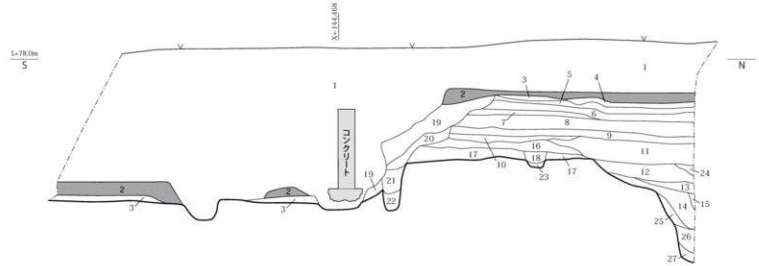
最上層は駐車場造成に伴う層厚約 2m の盛土層である。その下層には層厚 10 ～ 30cm の旧作土層がほぼ全面に残るが、北端部では約 1.7m の畔状の高まりがある。北壁の項で触れたように、これは棚田状の水田の段差の部分であったと考えられる。旧作土層の下面には層厚 5 ～ 10cm の床土層と考えられるシルト層が続き、奈良時代の瓦類を多く含む整地層と考えられる粗砂混じりのシルト層が堆積する。この整地層は地形的に低い南側にいくにつれて層厚を増して上面が水平になっていることから、傾斜する地形を水平にするための造成であると考えられ、水田として耕作地化する段階の整地層であると考えられる。南側では緩やかな谷状の地形となり、ここでは谷の肩部が比較的明瞭である。埋土は 2 層に分かれ、奈良時代の瓦や土器の細片を多く含む整地土で埋められている。

突出部西壁（図 7、巻頭図版 2、図版 10）

南半では宅地開発およびそれに先立つ水田造成時に大きく削平されているものの、北側は比較的良好な状態で遺存している。

最上層は層厚約 1m の盛土層であり、その下層は層厚 5 ～ 25cm の旧作土、層厚約 5cm の床土層となる。また、その下層では層厚約 50cm の間に土壌化した作土層が重層的に堆積する。SA060 が完全に削平されたのちに造成された中世段階の水田作土層であると考えられる。その下面では SA060 の造成に関わる層厚 10 ～ 25cm の地山起源の盛土層が確認される。北側の SD010 は一気に埋没したのではなく、最終的には約 45cm の浅い溝として残っていたものが、埋め戻されて平坦に造成された状況が看取される。SA060 および SD010 の状況についてはここでは扱わず、それぞれに遺構の報告で詳述する。

突出部 西壁



1. 盛土（宅地造成時の客土）
2. オリーブ黒 10Y3/1 粗砂混シルト（旧耕土）
3. 灰 5Y5/1 細砂（旧耕土下部）
4. 灰 5Y6/1 細砂（旧耕土下部）
5. 黄褐 2.5Y5/4 粗砂混シルト（土部に鉄分沈着。床土）
6. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂混細砂（径～ 10mm の礫を若干含む。若干土壌化）
7. オリーブ褐 2.5Y4/4 粗砂混シルト（鉄分沈着。6 層の耕土に対応する床土か）
8. 暗灰黄 2.5Y 4/2 粗砂混細砂（径～ 10mm の礫を若干含む。若干土壌化）
9. オリーブ褐 2.5Y4/3 粗砂混シルト（鉄分沈着。8 層の耕土に対応する床土か）
10. にぶい黄褐 10YR5/4 粗砂混粘土（炭化物粒を若干含む）
11. 黄灰 2.5Y4/1 細礫混シルト（SD010 理土）
12. 灰 10Y4/1 細砂混粘土（瓦片を若干含む）（SD010 理土）
13. 黄灰 2.5Y5/1 粗砂混シルト（瓦片を多く含む）（SD010 理土）
14. 灰黄 2.5Y6/2 粗砂混粘土（SD010 理土）
15. 灰 7.5Y6/1 粗砂混粘土（SD010 理土）
16. 黒褐 10YR3/2 粗砂混粘土（細礫・炭化物粒を若干含む）
17. 明黄褐 2.5Y7/6 粗砂混粘土（暗灰黄 2.5Y5/2 シルトブロックを含む）
18. 黄灰 2.5Y4/1 粘土（にぶい黄 2.5Y6/4 地山粘土ブロックを含む）（SP156 理土）
19. 灰黄 2.5Y6/2 粗砂混極細砂（水田法面の造成土）
20. にぶい黄 2.5Y6/3 細礫混シルト（浅黄 2.5Y7/4 粘土ブロックを含む）
21. 灰オリーブ 5Y5/2 粘土（にぶい黄 2.5Y6/4 地山粘土ブロックを含む（S-157 理土）
22. 黄灰 2.5Y5/1 粗砂混粘土（SP157 理土）
23. 黄灰 2.5Y5/1 粘土（細砂・明黄褐 10YR6/6 地山粘土ブロックを若干含む）（SP156 理土）
24. 褐灰 10Y4/1 細礫混シルト（SD010 理土）
25. 灰 5Y5/1 礫混粗砂（地山崩落土か）（SD010 理土）
26. 黄灰 2.5Y5/1 礫混粗砂（瓦片を含む）（SD010 理土）
27. 黄灰 2.5Y4/1 粗砂（湧水する）（SD010 理土）

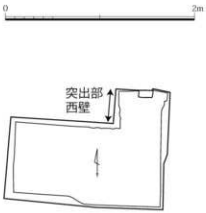


図 7　壁面土層断面図（4）（S=1/40）

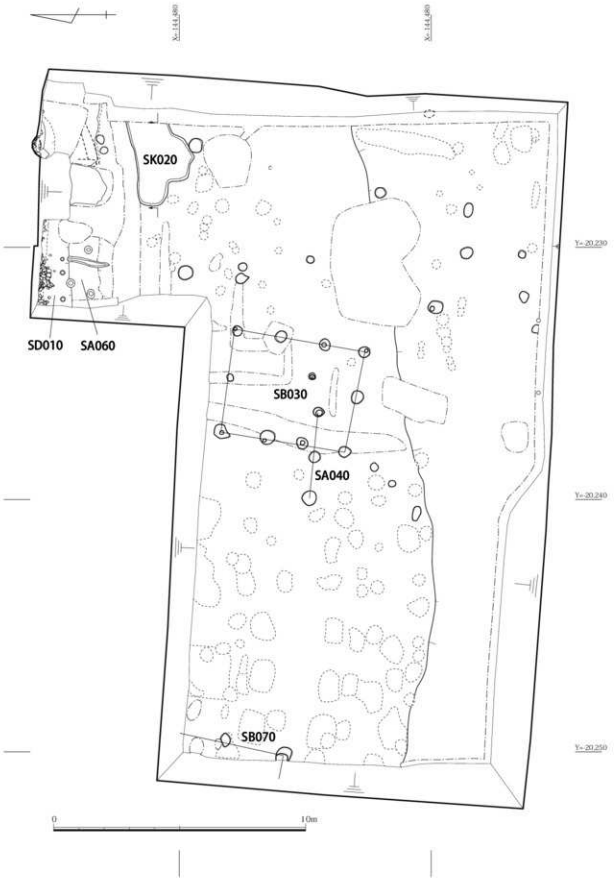


図 8　全体平面図（S=1/150）

第２節　古墳時代の遺構と遺物

1. 遺構

検出遺構は掘立柱建物と掘立柱列である。柱穴からの出土遺物がなく、厳密には古墳時代の遺構とは確定できない。建物跡の軸線が正方位から東に振れる点が周辺の調査で検出されている古墳時代の掘立柱建物跡と一致するほか、建物規模も近似すること、包含層から古墳時代後期の遺物が出土することから古墳時代の可能性が高いものとして報告する。

ただし、調査地は平安時代以降、西大寺の寺僧や作人が集住する村である寺辺郷であったと考えられており（石上 1997）、これも確証はないものの、平安時代以降、中世を含んだ時期の建物跡であった可能性も残されている。

掘立柱建物

SB030（図８・9、図版５）

調査区の中央北寄りで検出した掘立柱建物跡である。南北三間、東西二間で南北棟である。南北 5.1m、東西 4.1m の規模をもつ。柱間間隔は若干のばらつきはあり、南北方向は 156 ～ 179cm、東西方向は 182 ～ 220cm で桁行に比して梁間の柱間が長めである。建物の方向は桁行方向で座標北から東に 9°26′24″振れている。柱穴は円形を呈し、直径 40 ～ 50cm で、深さは最も残りの良いもので約 40cm である。いずれも柱痕跡が明瞭に観察され、直径は 10 ～ 20cm を測る。柱穴からは若干の土器片が出土しているが、年代を特定するには至らない。

しかしながら、調査地の西 90m の市 322 次調査（奈良市 1996）で検出された古墳時代の掘立柱建物跡と考えられている SB05 とは方向、構造、規模ともに近似している。SB05 を構成する柱穴からの出土遺物の報告はないが、近い方向をもつ掘立柱建物跡である SB06 と SB07 からは 6 世紀後半から末にかけての遺物が出土している。

SB070（図８・10）

調査区の北西端で検出した掘立柱建物跡である。南北方向に並ぶ２基の柱穴を検出したのみであり、厳密には建物跡とは断定できない。しかしながら、軸線の方向が SB030 と平行し、南側の柱穴 a は SB030 の南側梁間の延長線上に位置することから、２基の柱穴は調査区外に展開する掘立柱建物跡の一部である可能性を考え、SB070 として報告することとした。

南北一間を検出したのみで、これ以外が調査範囲外となるため詳細は不明である。柱間は 228cm を測る。方向は座標北から東に 16°36′振れている。柱穴は不整な円形を呈し、直径は 34 ～ 55cm で深さは 20 ～ 25cm で、柱痕は確認できない。柱穴からの出土遺物はないが、市 322 次調査で検出された古墳時代の建物跡 SB06 と SB07 と近似した方向である。

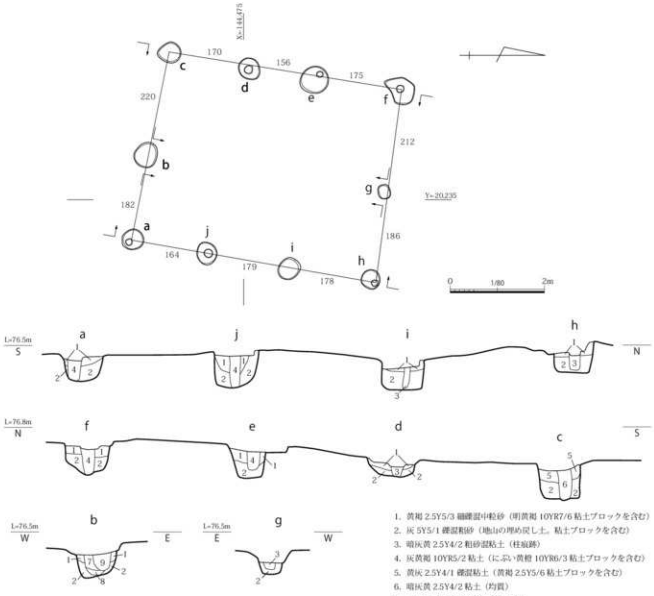


図 9　SB030 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

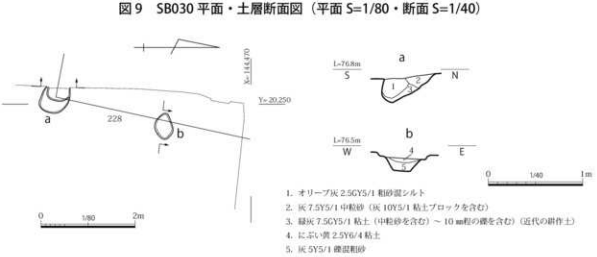


図 10　SB070 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

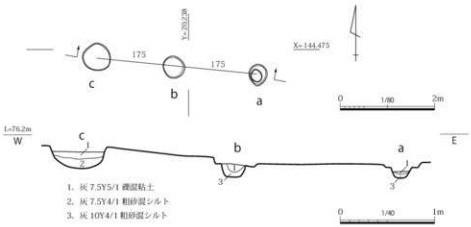


図 11　SA040 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

掘立柱列

SA040（図 8・11）

SA040 は SB030 と重複する形で検出した掘立柱列である。二間分のみであるが、東西方向に直列し、柱間がいずれも 175cm で、埋土が共通することで一連の遺構であると認定した。SB030 とは直接的な切り合いがなく、前後関係は不明である。

柱穴は直径 20 ～ 50cm で、深さは 15 ～ 25cm である。いずれも柱痕跡は確認できない。方向は西で座標北から西に 6° 18′ 14″振れている。

2. 遺物

古墳時代の遺物は、遺構からの出土はなく包含層から奈良時代以降の遺物とともに少量が出土しているのみである。

包含層（図 27、図版 24）

35 は円筒埴輪片である。土師質で浅黄橙色を呈する。タガの部分が残るのみで外面調整は不明、内面はナデ調整である。埴輪片はこれ以外にも数点出土し、いずれも細片で図化に耐えうるものはないが、外面の調整は一次調整のタテハケのみで後期の特徴を有している。

36・37 は須恵器甕である。37 には外面にヘラ記号と考えられる N の裏文字状の線刻がある。

44 は須恵器杯蓋である。外面の口唇部にはハケ目状の刻み目が残る。細片ではあるが、TK10 型式段階であると考えられる。

第３節　奈良時代の遺構と遺物

1. 遺構

検出遺構は条坊区画に関係する築地塀の痕跡とそれに伴う溝や柱穴のほか、土坑などである。先に報告した古墳時代と考えられる掘立柱建物が検出されたにも関わらず、奈良時代に帰属する掘立柱建物跡は検出されず、結果的には奈良時代に関しては、積極的な土地利用はされていなかったと考えられる。

SA060 は宅地造成に伴う地形改変を受けつつもかろうじては遺存していたが、残存状況は良好とはいえない。また、北側に掘削された SD010 も大半は調査範囲外となり、東側では切土により上面を大きく削平されている。

築地塀

SA060（図 8・12・13、図版 6 ～ 14）

SA060 は調査区東側の突出部北端で検出した条坊区画関連遺構である。遺存状態は良好とはいえないものの、北側の SD010 出土瓦の組成から築地塀であったと考えられる。

東側および南側は中世以降の耕作地化や現代の宅地造成に伴って大きく削平されており、東西約 2.5m、南北約 1.5m が残るのみである。平坦に成形された地山上面に、層厚 10 ～ 25cm の地山を起源とする明黄褐色粘土層による盛土が行なわれ、当該層上面から柱穴などの遺構を検出している。さらにこの上層には土壌化の著しい黒褐色粘土層の薄層が堆積する。SD010 の切り込み面との関係からみると、当該層は SA060 造営時の盛土層とも見なしうるが、SD010 埋土の最上層（図 7-11 層）からは中世以降の土器細片が出土していること、後述する柱穴列（SP151 － SP152）の検出面との関係からみて、築地塀が削平されてわずかな高まりとして残っていた中世以降の堆積であると判断している。

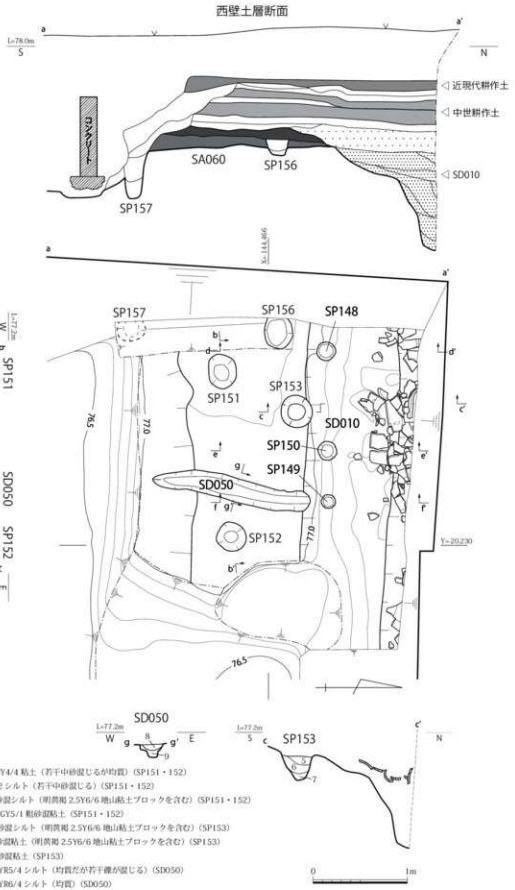
盛土層上面からは 4 基のピットと 1 条の溝を検出している。

このうち、SP151 と SP152 は東西に並び、規模や埋土の状況などから一連のものであるといえる。柱間の心々距離は 175cm、柱穴は円形を呈し、直径約 30cm、深さは SP151 が 35cm、SP152 が 28cm である。両者とも、柱痕跡が明瞭に残り、柱痕直径は約 13cm を測る。2 基のみの検出ではあるが、築地塀造成に伴う添柱穴あるいは足場穴であると考えられる。

SP153 と SP156 は SD010 の肩部付近で検出したもので、直径約 30cm の円形を呈し、深さは SP153 が 25cm、SP156 が 17cm である。両者ともに柱痕跡は確認できず、性格は不明である。

また、北側で検出した SD010 の法面では東西方向に直列する 3 基のピットを検出している（図 12、図版 8）。柱穴は円形で直径 15 ～ 20cm を測り、深さは 11 ～ 23cm である。埋土は共通するものの単層で柱痕は観察できない。法面に掘削されているものの、底面は水平を意図している状況が看取される。柱間は SP148 － SP150 間が 105cm、SP149 － SP150 間が 54cm と不規則である。直径にもばらつきがあることなどを勘案すると、築地塀構築時等に一次的に設けられた足場穴であった可能性が想定される。

SD050 は SA060 上面を横断するように検出した南北溝である。方向は北で東にやや振れている。検出長は 1.66m で北側では SD010 の法面に開いている。幅は 26cm、深さ 14cm で断面は台形状を呈する。埋土の状況からは流水の痕跡は確認できず、人為的に埋め戻されている状況が観察できる。出土遺物はないが、層位的には SA060 と関連する遺構であると考えられる。



1. オリーブ褐 2.5Y4/4 粘土（若干中砂混じるが均質）（SP151・152）
2. 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト（若干中砂混じる）（SP151・152）
3. 灰 10Y5/1 粗砂混じシルト（明黄褐 2.5Y6/6 地山粘土ブロックを含む）（SP151・152）
4. オリーブ灰 2.5GY5/1 粗砂混粘土（SP151・152）
5. 灰 7.5Y5/1 粗砂混じシルト（明黄褐 2.5Y6/6 地山粘土ブロックを含む）（SP153）
6. 灰 10Y5/1 粗砂混粘土（明黄褐 2.5Y6/6 地山粘土ブロックを含む）（SP153）
7. 灰 7.5Y5/1 粗砂混粘土（SP153）
8. にぶい黄褐 10YR5/4 シルト（均質だが若干礫が混じる）（SD050）
9. にぶい黄褐 10YR6/4 シルト（均質）（SD050）

図 12　SA060 関連遺構平面・断面図（S=1/40）

SA060 下層（図 14、図版 13・14）

SA060 では上面の盛土層を除去した地山面でピットを検出している。一部を除いて遺物は出土しておらず、年代を特定しがたいが、ここで報告しておくこととする。検出したピットは円形を呈するものが多く、直径は 15 ～ 50cm とばらつきがあり、深さは 10 ～ 20cm ほどのものが多い。いずれも小規模で柱痕跡などは確認できない。SP160 は直径 52cm、深さ 41cm で相対的には大きなピットであり、最上層からは土師器と須恵器の甕片が出土している。

溝

SD010（図 8・12・13、図版 6・7）

SD010 は SA060 の北側で検出した東西方向の溝である。溝の方向や規模、位置関係などからみて、SA060 と一連の遺構である。調査区北端で検出し、北側の大半は調査範囲外となる。溝心は調査範囲外であるが、溝心に近い地点の座標値は X=-144,464.3、Y=-20,232.0 である。検出幅 1.55m、深さは検出した最深部で 125cm を測る。断面形状をみると、2 段に掘削されており、下層は礫混じりの粗砂が堆積し、中位以上は粘土～シルトが堆積する。大半は調査範囲外ではあるが、状況からみて幅 3m を超える溝であると考えられる。中位に堆積する粘土～シルト層からは、南側から一括で埋没したと考えられる瓦片が多量に出土している。瓦は溝心に向かって緩やかに傾斜して堆積しており、溝がある程度埋まった段階で埋没した状況が看取される。検出時には、折り重なる瓦片と瓦片の間にきわめて粘性の高い均質な粘土が入り込んでいた。これは瓦片が堆積した段階には瓦片と瓦片の間に空隙が生じて、埋没後にこの空隙に地下水が流れ込んだことが成因であると考えられる。したがって、これらの瓦片は徐々に埋没していったのではなく、一気に埋没したものと考えられる。出土瓦については遺物の項で報告するように丸瓦、平瓦、熨斗瓦、面戸瓦が出土しており、丸瓦と平瓦の比率からも築地塀に葺かれていた瓦が、倒壊もしくは人為的に投棄され、短期間に埋没した可能性が高い。

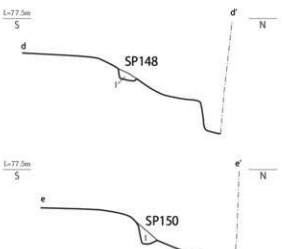


図 13　SD010 法面検出ピット土層断面図（S=1/40）

土坑

SK020（図 8・15、図版 2）

SK020 は調査区の北東で検出した。地山面での検出ではあるが、北側の肩部ラインが中世の水田区画と対応する状況が看取され、奈良時代の瓦や土器片が出土するが、中世以降に下る可能性が高い。平面形は不定形で東西は検出長で 3.3m、南北は 2.4m、深さは約 15cm を測る。土坑としたが、全体に浅く層状を呈しており、整地層であった可能性もある。

図 14　SA060 下層検出遺構平面・土層断面図（S=1/40）

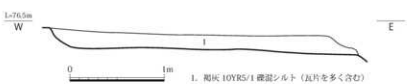


図 15　SK020 土層断面図（S=1/40）

2. 遺物

SD010 出土遺物

丸瓦（図 17・18、図版 15 ～ 17）

出土した丸瓦は破片数で 148 点、総重量 25.936 kg を測る。

いずれも有段式（玉縁式）で丸瓦部凹面には布目圧痕と一部に糸切り痕、凸面側には縦位の縄叩き目が残る。玉縁凸面はヨコナデ、丸瓦部側面と端面は面取りを行う。色調は暗灰色を呈するものが多く、焼成はやや軟質である。

丸瓦筒部側面は 75 点を観察することができ、面取り形状から、まっすぐに一回だけ面取りしているもの（a 類）と 2 段階に分けて面取りを行うもの（b 類）に分類した（図 16）。a 類が 82.7%、b 類が 17.3% で前者が主流である。また、筒部端面が残る破片では、凹面側の角を面取りするものが 33.3% を占める。

上記の分類に基づき、以下掲載した丸瓦（1 ～ 5）について特徴的な点を中心に報告する。

1 は丸瓦筒部で、側面の面取りは a 類である。筒部端面側を上位として凸面の右寄りにヘラ書きによ

る 3 文字以上の線刻文字が確認できる。上の 2 文字については「修理」と読める。3 文字目については一本線の横画が残るのみで確証はないが、「司」の一画目であったとみても問題はない。

2 は丸瓦筒部で面取りは a 類である。筒部端面側を下位にして凸面の右寄りに「西」の刻印が押捺される。

3 ～ 5 は玉縁が残る丸瓦で 4 は完形である。いずれも側面の面取りは a 類である。玉縁はいずれも台形状の平面形状をもち、5 では筒部との段の幅が狭い。4 の完形丸瓦は全長 37.0cm、筒部長 30.3cm、重さは 2.0kg を測る。

平瓦（図 19 ～ 24、図版 18 ～ 21）

出土した平瓦は破片数で 604 点、総重量 95.432 kg を測る。

平瓦はいずれも一枚作りで、色調は灰色～暗灰色で焼成はやや軟質で、礫砂を多く含む。凹面は全体的に布目圧痕、凸面には縦位の縄叩き目が残る。凸面の縄叩きは瓦の端まで行わないものも数点確認できる。側面と端面は面取りを行うが、側面は面取りを行わないものもある。

出土した平瓦には側面まで凹面の布目痕が連続しているものが多く、全体の全体の 6 割強である点は特徴的である。今回、平瓦側面破片 253 点の観察を行ない、側面に布目痕が残るもの（A 類）と残らないもの（B 類）に大別し、面取りの回数（0 ～ 2）を付加して細分した（図 16）。

A0 類 : 面取りを行わず、布目痕が残るもの

A1 類 : 凸面側縁を斜めに 1 回面取りし、布目痕が残るもの

A2 類 : 両側縁を斜めに 2 回面取りし、側面中央に布目痕が残るもの

B1 類 : 凹面、凸面に対して垂直、あるいは 65 ～ 75 度の角度で斜めに 1 回面取りするもの

B2 類 : 両側縁を 2 回に分けて面取りするもの

なお、一枚の平瓦で一方の側面は布目痕を残すものの、もう一方は面取りにより布目痕が消されているものもみられ、1 つの平瓦であっても調整の異なるものも存在する。平瓦を二分割した割熨斗瓦では、細片の場合は通常の平瓦と区別できず、平瓦としてカウントして数えている可能性も完全に除外できてはいない。サンプル数も少なく、かつ上記のような条件付きではあるが、側面に布目痕を残す A 類が大半を占める点は特徴的であり、全体では A1 類が 43.4% と一番多く、順に B1 類が 30.2%、A2 類の 10.6%、A0 類の 9.8%、B2 類の 6.0% と続く。

また、平瓦の端面に関しては、粘土板に対して垂直に面取りを行うもの（ア）、凸面・凹面両側縁に面取りを行うもの（イ）、凸面に対して 65 ～ 80 度の角度で斜めに面取りを行うもの（ウ）に分類した。平瓦端面形状の割合はアが全体の 61.9% と一番多く、順にウの 35.9%、イの 2.2% である。端面形状イは側面形状 A0 類および A1 類でしか確認できないなど、相関関係が想定されるが、いずれもサンプル数が少なく、参考程度に留めておく。

上記の分類に基づき、以下では掲載した平瓦（6 ～ 21）について特徴的な点を中心に報告する。

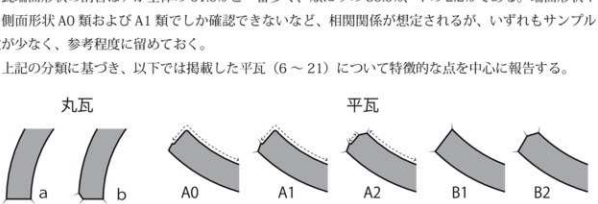


図 16　丸瓦・平瓦の側面形状分類（破線矢印は布目痕、ケバ間は面取り）

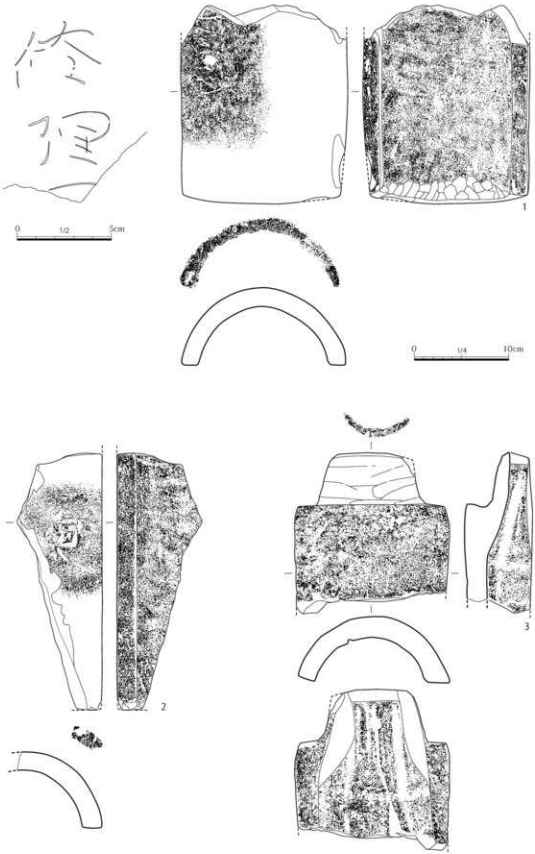


図 17　SD010 出土丸瓦実測図（1）（S=1/2・1/4）

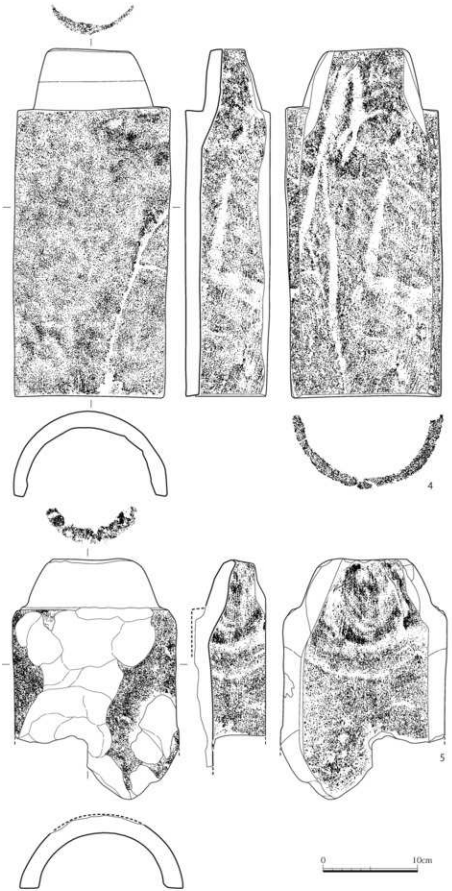


図 18　SD010 出土丸瓦実測図（2）（S=1/4）

6～9は平瓦で側面に布目痕を残す一群である（A類）。6は広端側が残る。側面中央には布目痕が明瞭に観察され、図中拓本の左側はA1類、右側は面取りを行わないA0類である。7は狭端側が残る。凹面側からみて左側面は布目痕が残るA1類であるが、狭端面寄りは部分的に面取りによって布目痕が消されている。布目痕は側面全体ではなく、凹面側から幅15mmで段差を生じている。右側面は大きく面取りしたB1類となっている。8は狭端面の一方の隅を欠くものの、ほぼ全形を留めている。側面形状はA1類である。9は狭端側が残る。側面形状はA1類である。当該資料では側面近くでは布目痕が一定の間隔で弧状を呈しており、布端の糸を一定の間隔で束ねたフリンジ状の布端処理がなされていた状況が看取され、側面の布目痕も通常のものとは違い、一定の間隔で筋状の圧痕となっており、束ねられた糸の痕跡であると考えられる。

10はほぼ完形の平瓦で、側面形状は布目痕が残らないB1類である。広端面幅28.2cm、狭端面幅24.6cm、長さ35.9cm、側面長は平均で37.8cm、重さ3.75kgを測る。11は側面形状A1類であり、12は大きく面取りを行うB1類である。13は厚さ約30mmと分厚く、凹面の布目痕を丁寧にナデ消すなど、異質な平瓦である。側面形状はB2類で、凹面側の面取りは幅広である。同様の特徴をもつ平瓦は他には出土せず、当該資料1点のみである。14は側面形状A2類である。凹面側の側縁の面取りは隅部ではなく、凹面側を幅広く面取りするものである。15～21は細片ではあるが、側面に残る布目痕が明瞭なものをピックアップして図化したものである。側面形状は15～20がA1類、21がA2類である。A1類では全体をとおして、凹面側から側面に布目痕が連続する凹面側縁はエッジをもたず、丸みを帯びるものが観察される。凸面台の形状を反映したものである可能性もあるが、丸みは側縁全体ではなく、部分的な場合もあり、凸面台で成形した瓦を敷き布とともにひっぱりあげた際に乾いていない瓦側縁が丸くなった可能性も考えられる。

平瓦の技法的特徴

SD010から出土した平瓦については、これまで報告してきたように凹面から側面にかけて布目痕が残るものが大半を占める点が特徴的である。

平瓦側面に布目痕を残す平瓦については、平城宮跡の軒平瓦にも側面と狭端面に布目痕を残すものが確認され、木製の凸型台狭端面に立ち上がりの存在が指摘されており（花谷1991）、正倉院の一枚作り平瓦でⅠ類とされるものに凹面の布目が側面に及ぶものが少数あるとされる（岩永2016）。また、恭仁京の一枚作りの平瓦D類にも側面に布目痕を残すものが確認されている（上原1984）。

しかしながら、SD010出土平瓦では側面に布目痕を残すものは少数ではなく主流であり、近隣の西大寺および周辺の調査で同様の特徴をもつ平瓦の出土が報告される点は、時期的にも空間的にもきわめて重要であり、留意すべき点であるといえる。

西大寺旧境内第25次調査のSD01新からは平瓦（軒平瓦）の側面に布目痕を残すものが49点確認され、軒平瓦6732型式Q種では凹面から側面にかけて連続する布目痕が確認されている（奈良市教育委員会2013）。報告では平瓦広端部片にも確認できることから、軒平瓦のみならず平瓦にも同様の製作技法が用いられることが指摘されている。製作技法については「上面から側面にかけてほぼ直角に立ち上がる形状の凸型台でタタキが施された後に、側面付近の成形が凹型台で行われる」とされる。

また、市430次調査では、右京一条北大路と関連する東西溝SD02が検出され、ここからも平瓦の側面に部分的に布目痕が残る資料29点の出土が報告されている（奈良市教育委員会2001）。

すでに指摘されるように凹面から側面に布目痕が連続することから、凸型台は側面がほぼ直角に立ち上がる形状であったことが看取される。この立ち上がり部分については、削り出されたものである可能性の

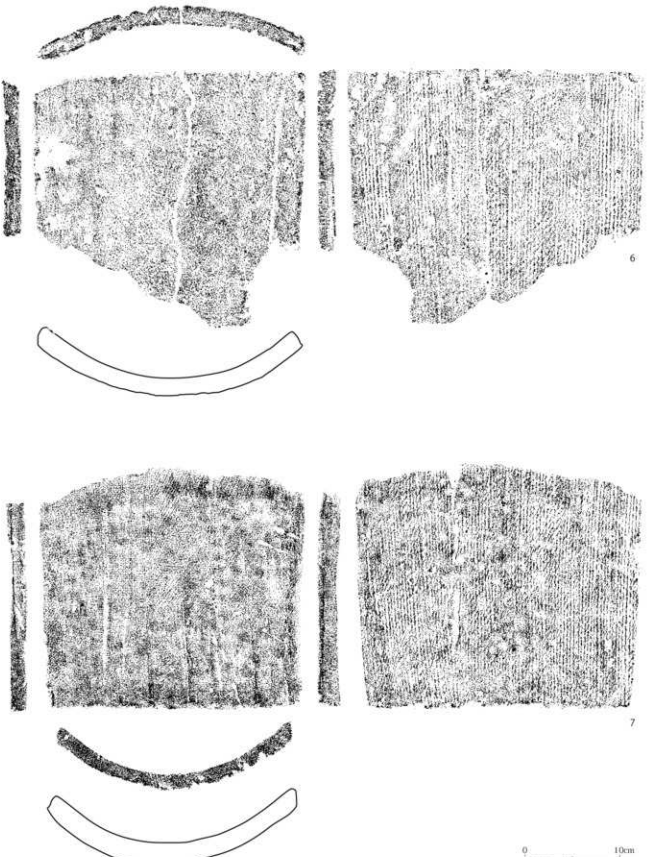


図 19　SD010 出土平瓦実測図（1）（S=1/4）

ほか、板材もしくは角材を付加した可能性も想定されるが、その痕跡から推知することは難しい。したがって、その実態は不明ながらも、本稿では凸面台の両側面の立ち上がりを「側面板」と仮称して記述を進める。

出土した平瓦の厚さは 13 ～ 30mm と幅があるが、20mm 前後のものが大半を占める。側面に布目痕を残す平瓦では側面を面取りするものでも、側面板の痕跡を段差で残すものが多く、その幅は 12 ～ 17mm を測る。ただし、瓦などの焼き物の場合、乾燥収縮と焼成収縮を考慮する必要があり、側面板の高さは実際にはもう少し高かったことになる。

粘土角材から切り出した粘土板を凸型台にのせた時点で側面板から粘土が 3 ～ 8mm ほどはみ出た状態であり、A0 類はそのままに、A1 類とした側面形状をもつものは、このはみ出た部分を凸型台にのせたまま面取りすることにより成形したものであると考えられる。A2 類や B 類では凹型台にのせ換えて側面の成形が行なわれているが、A0 類および A1 類ではこの工程が必要なく、側面板に規制されて同じ幅の平瓦を製作する上で効率的かつ省力化が図られているとみることができる。

いずれにせよ、西大寺および周辺の条坊関連遺構の築地塀に用いられた平瓦制作の技法的特徴が共通する点は北辺坊の造営年代や造営主体を考える上においても重要な情報をもたらすものといえる。

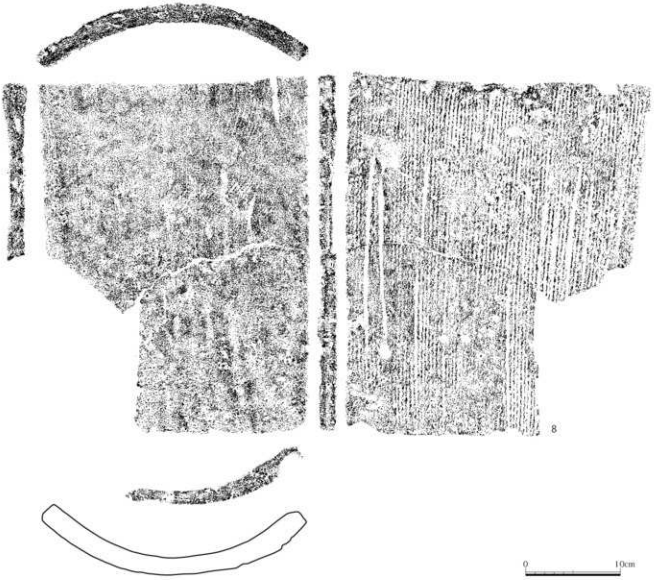


図 20　SD010 出土平瓦実測図（2）（S=1/4）

図 21　SD010 出土平瓦実測図（3）（S=1/4）

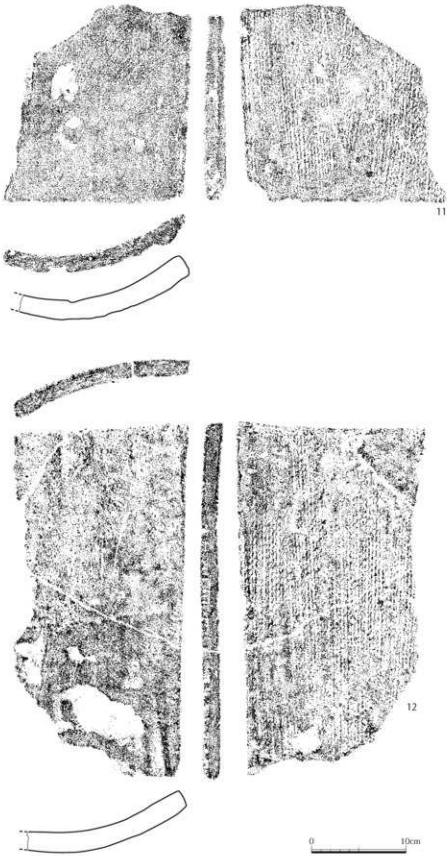


図 22　SD010 出土平瓦実測図（4）（S=1/4）

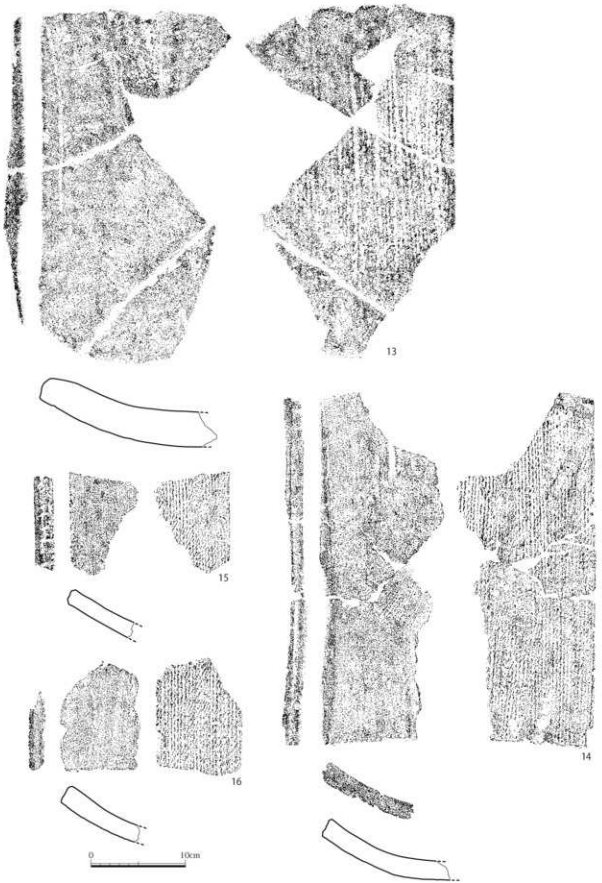


図 23　SD010 出土平瓦実測図（5）（S=1/4）

丸瓦と平瓦の数量計測

SD010 から出土した瓦はその出土状況から南側に存在した築地塀に伴うものであると想定されるものであり、それを検証することを一つの目的として数量計測を行なった。

破片となって出土した平瓦の数量計測方法については上原真人氏や五十川伸矢氏によって整理されている（上原 1984、五十川 1986）。これによると、平瓦の四隅を数える「隅数計測法」、平瓦の側面長の総計を平均側面長の２倍で割る「側面長計測法」、端面長の総計を端面長の２倍で割る「端面長計測法」、平瓦の凸面あるいは凹面の面積の総計を平均面積で割る「面積計測法」、重量の統計を平瓦１枚分の平均重量で割って枚数を算定する「重量計測法」、破片数を数える「破片数計測法」がある。

SD010 は調査範囲が限定的で出土量もさほど多いとは言えないものの、一括性の高い資料であることから、表１に示したように破片数計測法・重量計測法・隅数計測法・側面長計測法を用いて数量を推計し、丸瓦と平瓦の比率について検討を行った。なお、平瓦の隅数計測法では、細片の場合、広端面と狭端面の区別が難しい資料もあることから、その区別はせず、総数を４で割ることとした。また、

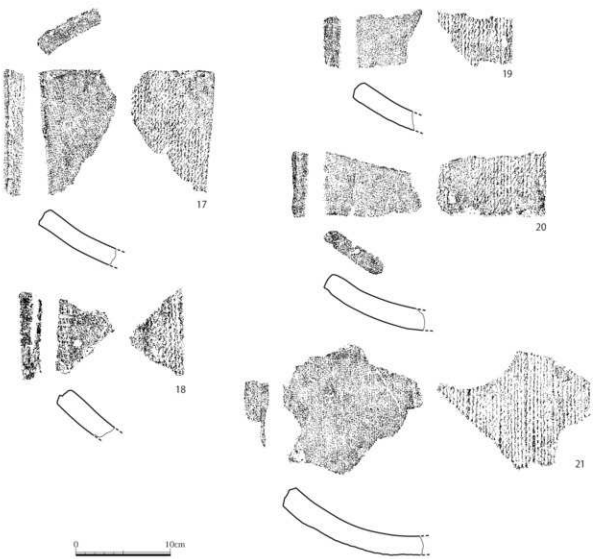


図 24　SD010 出土平瓦実測図（6）（S=1/4）

丸瓦では筒部隅部のほか、玉縁の隅部、段部の隅部の３ヶ所の破片数をそれぞれカウントして２で割る方法をとった。

SD010 から出土した丸瓦および平瓦では完形もしくは完形に復元できるものは少なく、重量計測法および側面長計測法における基本モデルの設定にはやや不安も残るところである。なお、出土平瓦のうち、側面が完全に残るものでは最大は 384 mm、最少は 372mm を測り、平均は 378 mm で、平均重量は 3,750g である。出土丸瓦の筒部側面が完存するのは１点のみで、側面長はそれぞれ 302 mm、304 mm で、平均は 303 mm で、重量は 2,000 g である。

個々の結果については表１に記したとおりで、丸瓦と平瓦の個体数では側面長計測法が最も多く、相対的には有意なデータであるといえる。側面長計測法丸瓦と平瓦の比率は１：2.2 であり、重量計測法で得られた比率も１：2.0 とも近似する。丸瓦の隅数計測法では段部隅数計測法による個体数が最も多く、これを採用すると１：2.4 となり、これも大きく乖離することはない。

もともと有意とはいえない破片数計測法を除くと、丸瓦と平瓦の推定個体数の比率は近似している。この比率は表２に示した他遺跡における分析結果とも対応する傾向が看取できる。また、文献史料ではすでに上原真人氏が指摘するように、「造東大寺牒」（天平勝宝８年８月 14 日）と「法勝寺新堂用途勘文案」（応徳２年正月）に丸瓦と平瓦の枚数の記録がある（上原 1984）。

「造東大寺牒」は天平勝宝 8(756)年 11 月 15 日以前に入用の瓦として、「男瓦九千枚、女瓦一万八千枚、堤瓦二千四百枚、鐙瓦三百枚、宇瓦三百枚」が発注されており、丸瓦（男瓦）9,000 枚と平瓦（女瓦）18,000 枚の比率は１：2 となる。

「法勝寺新堂用途勘文案」は応徳２（1085）年に法勝寺内に新堂と三宇の廊を建てるにあたっての材料とその値、工賃等を記したものである（清水 1999）。時期的にはやや下るが、記された丸瓦 17,132 枚と平瓦 43,384 枚の比率は１：2.5 で、整合的である。

また、平城宮第二次大極殿院の復元では丸瓦 47,700 枚、平瓦 119,900 枚が用いられており、その比率は１：2.51 であり、参考となる。

結果、SD010 出土の瓦群は軒瓦を欠いてはいるが、丸瓦と平瓦の比率は通有の屋根瓦の比率を保っていることから、後述する熨斗瓦、面戸瓦とともに隣接する築地塀に葺かれていたもので、きわめて一括性の高い一群であると判断できる。

熨斗瓦（図 25、図版 22）

熨斗瓦は図化した３点が出土した(22 ～ 24)。いずれも平瓦の凹面側にタテ方向の浅い截線を入れて、焼成後に二分割したものである。

22 は全体が残り、長さ 35.5cm、幅 13.1cm、厚さ 2.1cm である。截線の深さは５～ 7mm である。23 は一方の端を斜めに成形したもので、長さは長辺が 22.0cm、短辺が 14.2cm、幅は 11.7cm、厚さは 2.0cm である。23 は截線の深さが 3mm である。色調はいずれも灰白色を呈し、焼成は 22 と 23 が比較的硬質であるのに対して 24 は軟質である。

截線はいずれも焼成前に鋭利なヘラ状の工具で行なわれており、この部分は平滑であるが、これ以外は割ったままの破断面である。凹面には布目痕、凸面には縄タタキ痕が残る。縄タタキは他の出土平瓦に比して縄が細く密であり。実物を実見していないが、図で見る限りにおいては西大寺跡出土の熨斗瓦と類似する特徴をもつ（西大寺 1990）。西大寺出土の熨斗瓦では側面に凹面から連続する布目をもつ例も確認されているが、今回の調査で出土したものはいずれも側縁を面取りする平瓦側縁分類の B1 類で布目痕は残らない。

表 1　丸瓦・平瓦の推定個体数と比率

破片計測法	重量計測法	隅数計測法	側面長計測法
平瓦破片数（点）	平瓦重量（g）	隅数（点）	側面長（mm）
604	95,432	110	26,018
	平瓦平均重量（g）	平瓦隅数（点）	側面長平均（mm）
	3,750	4	378
	重量計測法個体数（点）	隅数計測法個体数（点）	側面長計測法個体数（点）
	25.4	27.5	34.4

破片計測法	重量計測法	隅数計測法			側面長計測法
丸瓦破片数（点）	丸瓦重量（g）	筒部端面隅数（点）	段部隅数（点）	玉縁部隅数（点）	筒部側面長（mm）
148	25,936	22	23	20	9,692
	平瓦平均重量（g）	筒部端面隅数（点）	段部隅数（点）	玉縁部隅数（点）	筒部側面長平均（mm）
	2,000	2	2	2	303
	重量推定個体数（点）	筒部隅数計測法個体数（点）	段部隅数計測法個体数（点）	玉縁部隅数計測法個体数（点）	側面長計測法個体数（点）
	13.0	11.0	11.5	10.0	16.0

破片計測法	重量計測法	隅数計測法			側面長計測法
丸瓦：平瓦	丸瓦：平瓦	丸瓦：平瓦	丸瓦：平瓦	丸瓦：平瓦	丸瓦：平瓦
1：4.1	1：2.0	1：2.5	1：2.4	1：2.8	1：2.2

表 2　他遺跡および文献史料にみる丸瓦と平瓦の比率

遺跡名	丸瓦：平瓦	計測法	文　献	備　考
平城京右京北辺	1：2.11	重量計測法	元興寺文化財研究所 2005	
西隆寺跡	1：2.60	重量計測法	奈良国立文化財研究所 1993	
平城京右京一条北大路・西三坊大路（第 430 次）SX01	1：2	出土数	奈良市 2011	平瓦としたものには割瓧斗瓦を含む
平城京右京一条北大路・西三坊大路（第 430 次）SD02	1：5	出土数	奈良市 2011	平瓦としたものには割瓧斗瓦を含む
平城京左京四条二坊一坪	1：3.3	隅数計測法	奈良国立文化財研究所 1987	
恭仁京大極殿地区	1：2.2	隅数計測法	京都府教育委員会 1984	

文献史料	丸瓦：平瓦	文　献	備　考
「造東大寺牒」天平勝宝 8 年 8 月 14 日発注	1：2	『大日本古文書』第 4 巻 p.180	平瓦 18,000 枚、丸瓦 9,000 枚
「法勝寺新堂用途勘文案」応徳 2 年正月	1：2.5	『平安遺文』1228 文書	平瓦 43,384 枚、丸瓦 17,132 枚

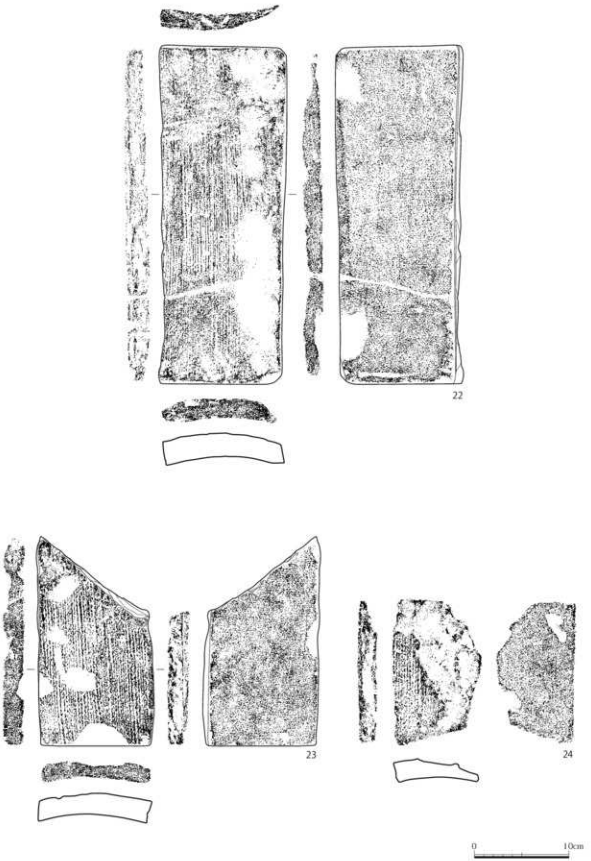


図 25　SD010 出土熨斗瓦実測図（S=1/4）

面戸瓦（図 26）

面戸瓦は図化した５点が出土した（25 ～ 29）。出土した面戸瓦は丸瓦を焼成前に加工して作った蟹面戸である。いずれも内縁を浅く面取りしており、平城宮の分類では蟹面戸Ⅱ式Ａとされるものである（奈良国立文化財研究所 1991）。

25は完形品で長さは15.4cm、上端幅は13.2cm、下端幅は9.6cm、厚さは2.0cmを測る。凹面は布目が残るが、凸面はナデ調整である。灰色を呈し、焼成は比較的硬緻である。26 ～ 29 は焼成が軟質で内面の面取りが浅い一群であり、厚さも 1.5cm 前後で特徴が共通している。凹面は布目が残るが、凸面はナデ調整である。

塼（図 26）

30 は細片で側縁を残さないが、4.5 × 3.7cm の面を残す塼と考えられる土製品である。浅黄橙色を呈し、焼成は軟質である。

SK020 出土遺物（図 27、図版 23）

31 は須恵器杯蓋、32 は須恵器杯Ｂである。

SP160 出土遺物（図 27、図版 24）

33 は土師器甕で最上層から出土した。胴部内面は指オサエ、外面は器壁が荒れていて調整は不明である。SP160 からは須恵器甕片も出土している。

包含層出土遺物（図 27、図版 24）

34 は調査区南東の包含層から出土した軒丸瓦である。今回の調査で出土した唯一の軒瓦である。瓦当面は摩滅しているが、西大寺四王院所用瓦とされる 6236 型式Ａ種である。

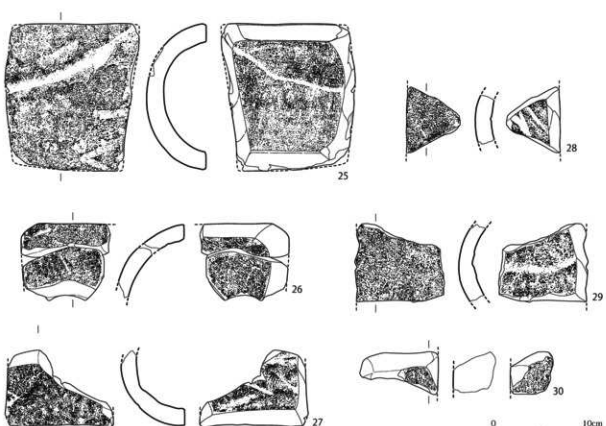


図 26　SD010 出土面戸瓦・塼実測図（S=1/4）

38 ～ 40 は製塩土器で、いずれも南側の谷状の落ち込みに堆積した包含層から出土した。外面は粗い平行タタキ、内面はナデ調整である。平城宮・京製塩土器分類では 3 類とされるものに該当する（神野 2013）。

41・42 は須恵器である。41 は杯 A、42 は内面に漆膜が残る甕の胴部片である。

46 は平瓦片である。焼成は須恵質で硬緻、色調は明灰色を呈する。凹面は布目痕を残し、側縁および端縁は面取りを行っている。凸面はヘラ状工具を用いた不定方向の丁寧なナデ調整で、縄タタキ痕は残らない。SD010 出土の平瓦とは特徴を異にしている。

43・45 は奈良時代の遺物ではないが、一項を設けず、包含層出土遺物としてここで報告しておく。

43 は美濃瀬戸の天目椀である。灰褐色の釉がかかる。包含層としているが、旧耕作土と考えられる層からの出土であり、調査地周辺が耕地化した時期の一点を示す遺物であると考えられる。

45 は機械掘削中に上層の包含層から出土した。土師質ではあるが、硬緻な焼成である。近世段階の火消壺の蓋であろうか。

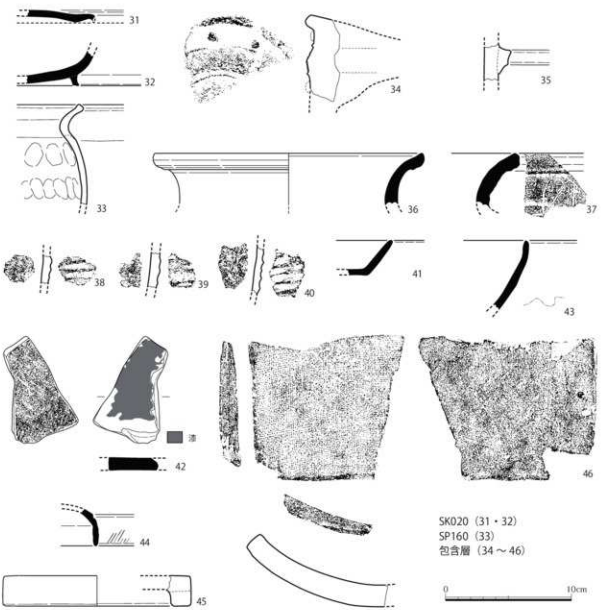


図 27　遺構・包含層等出土遺物実測図（S=1/3）

第 4 章　調査のまとめ - 要点の整理と課題

はじめに

今回の調査地は『平城京条坊総合地図』では、平城京右京北辺三坊五坪と六坪間の条間小路が推定さる地点であり、調査の重要課題の一つとして条坊区画の検出を掲げていた。調査区の設定にあたっては、東側をＬ字形に拡張し、条坊区画検出の可能性を高めることを企図した。結果、この拡張が奏功し、調査区端ではあったが、すでに報告してきたように東西方向の条坊区画を検出するという成果をあげることとなった。また、条坊区画の溝からは「修理□」と書かれた丸瓦が出土し、築地塀に葺かれていた可能性が高いことを指摘するに至った。

明確な形での東西方向の条坊区画の検出と西大寺・西隆寺の造営と関係が深い修理司と関わると考えられる文字瓦の出土は、西大寺寺域や北辺坊などを検討するうえにおいて、きわめて重要な位置を占めるものといえる。本来であれば、総合的に検討を加えるべきところであるが、ここでは紙幅の関係もあり、項目を分けて予察的にまとめておくこととしたい。

1. 北辺坊との関係について

平城京右京の北西には、一条北大路の北側に張り出した区画の存在が指摘され、この区画は「平城京右京北辺坊」（以下、「北辺坊」とする）と呼ばれている。この北辺坊をめぐっては、古くから論争の対象となり、存否論争を嚆矢とし、現在では遺存地割の検討などから京北条里や西大寺寺域との空間的、時間的関係性、さらにその範囲をめぐって、さまざまな議論が展開されている。

この地域に関しては、「大和国添下郡京北班田図」や「西大寺敷地図」、さらには「西大寺与秋篠寺堺相論絵図」など西大寺・秋篠寺の相論の際に作成された絵図など、鎌倉時代の貴重な古絵図が残る。こ

図 28　今回の調査区と一条北大路（『平城京条坊総合地図』を改変）

れにより遺存地割や発掘調査で検出された条坊区画との対比が可能となり、多角的に研究が進められている。そのなかでも井上和人氏による一連の研究は詳細であり、北辺坊と修理司の関係も示唆されるなど、今回の調査成果を評価するうえにおいても重要な視点が提示されている（井上 2004）。

このうち、発掘調査で検出される条坊関連遺構の検討は北辺坊の規模や年代などの具体的な検討を可能とする点で重要な位置を占めている。しかしながら、北辺坊においては条坊関連遺構の検出例は多くはなく、さらに検出された遺構に関しても、その評価や解釈は分かれるなどの状況が続いている。

このような状況にあって、今回の調査で検出された条坊区画は北辺坊地域において明確な形で検出された東西方向の条坊区画であり、出土した築地塀所用瓦とともに北辺坊の規模と時期を考える上において重要な一石を投ずるものといえる。

今回の調査では一条北大路道路心から約 138 m の地点で築地塀を伴う東西方向の溝 SD010 を検出した。すでに報告したように SD010 は調査区端で検出したために、厳密には溝心が確定できないものの、かつて、今回の調査地の西側に位置する市 322 次調査では、検出されるはずの東西方向の条坊道路が検出されず、東西方向の帯状の空閑地の存在が注目されていたが（佐藤亜 2005）、この場所に関しては、今回の調査との関係でみると、空閑地とした場所には築地塀が存在し、その直近北側の調査区外に東西溝が延びていた可能性が高い。遺構が検出されない空閑地は築地塀が削平された部分であるとみなすと理解がしやすい。

この場所は北辺坊一行説をとる佐藤亜聖氏、入倉徳裕氏が一行分（南行）の条坊区画北界、かつ京北条里南界とする地点に合致する（佐藤 2009、入倉 2020）。少なくとも鎌倉時代の絵図には描かれ、現代にいたるまで残る十五所神社の境内敷地北界が一致することも興味深い。

今回の調査で検出された条坊区画は一条北大路から条坊の一町分北側に位置しており、京北条里の地割との関係でみると、北辺坊では 2 行分の条坊区画を確保することはやはり困難と言わざるを得ない。

2.「修理□」と書かれた丸瓦について

2023 年 6 月、報告書作成のための整理作業中、出土丸瓦の一点に文字が刻まれていることに気づいた。すぐに奈良文化財研究所の馬場 基史料研究室長に判読の協力をお願いし、「修理□」と書かれている可能性が高いことが判明した。

『続日本紀』には神護景雲 2（768）年から宝亀 9（778）年までの間に「修理」の長官・次官の任命記録が散見される。昭和 46（1971）年に行われた西隆寺跡の調査では、「修理司」と書かれた木簡が 4 点出土し、これにより『続日本紀』に記された「修理」の本司名が「修理司」であることが知られることとなった（東野・今泉 1976）。

出土した文字瓦は 3 文字目の大半を欠いているが、一画目が横画であることから、これを「司」の一画目とみることも十分に可能で、その可能性は高いものと考えている。

修理司に関しては、造西隆寺司の長官伊勢老人が修理司長官を兼任、池原禾守が双方の次官となり、西大寺兜率天堂（弥勒金堂か）の建立に功があった英保代作が後に修理司の次官に任命されていることから修理司と西大寺・西隆寺の造営に関しては人的関係が強かったことが指摘されている（東野・今泉 1976、松原 1978、舘野 1993）。

修理司の職掌に関しては諸説あるが、井上和人氏が北辺坊の条坊設定を奈良時代後半の西大寺・西隆寺の造営に伴うものと考え、修理一般にとどまるものではなく、北辺坊の造営を担当し、管轄していたものとする（井上 2005）。一方、松原弘宣氏は「修理司の設置は西大寺・西隆寺造営を契機として宮内・京内の修理一般をつかさどるために設置」されたものと考えた（松原 1978）。また、今泉隆雄氏は「日

常的な修理を担当していたと考えられる造宮司が東内の造営のために繁忙で、そのために設置」されたとする（今泉 1983）。

なお、今回の調査では「修理□」銘丸瓦のほかに西大寺と関係する「西」の刻印もつ丸瓦も出土し、さらには、今回の調査で過半を占める側面に布目痕が残る技法的特徴をもつ平瓦が、西大寺旧境内（奈良市 2013）や一条北大路の北側溝と考えられる遺構からも出土している（奈良市 2001）。

西大寺および周辺の条坊関連遺構で共通する技法的特徴をもつ瓦が出土していることから、これらは同じ造瓦所から供給された瓦であった可能性も高く、さらに「修理□」銘丸瓦の出土は西大寺の造営と時を同じくして設置され、西大寺・西隆寺の造営にも関与していたと考えられる「修理司」との関係を強く示唆する重要な文字資料であるといえる。

修理司に関係すると考えられる瓦は「修」、「理」とその略体、「司」の刻印文字瓦が知られており、これら宮内の修理に使われた瓦については「生産の場、すなわち「修理」官が関与していたことを示す」ものとされる（森 1980）。

翻って、今回の文字瓦をみると、文字は線刻によるものであり、刻印文字瓦とは性格を異にするものであり、供給先を示すものであると捉えることも可能である。この瓦については瓦類の報告で記したように、一括性の高い瓦の一群に含まれており、差し替え等により二次的に持ち込まれた可能性は低く、調査地に存在した築地塀の造営段階の屋根に葺かれたものと考えられる。これらの事象を積極的に評価する立場に立てば、当地には修理司に関わる施設、あるいは修理司そのものが置かれていたと考えることもできるのではないだろうか。

文献史料の検討により、造西大寺司・造西隆寺司と密接な関係をもち、ほぼ時期を同じくして創設されたと考えられる修理司であれば、両寺に近接して設置されていたと考えても不思議ではなく、その敷地を既存の宅地や施設がある京内ではなく、新たに付加された北辺坊の一角に置いたと考えても矛盾はないのではと考える。

ここで留意されるのが、今回の調査地から西約 90m の地点の市 322 次調査である。比較的小規模な調査が多い周辺地域の中にあって、当該調査地は比較的広い面積が調査され、古墳時代から平安時代までの建物跡などが検出されている（奈良市 1996）。奈良時代の建物である SB10・11 は柱間 10 尺（3m）の長大な建物であり、馬道をもつ一連の建物である可能性が指摘されるなど、一般的な住宅地とは一線を画している。平安時代の遺構は東西に２棟が並び、炉跡とともに鞴羽口や鉄滓が出土するなど、工房関連の遺構群と考えられる。また、報告の文中では触れられないが、報告書図版 39 に掲げられた奈良時代の土坑 SK17 の写真をみると、複数の丸瓦が選択的に廃棄されている状況が看取される。最終的には廃棄されているが、これらの丸瓦が種類ごとにストックされていた可能性を考えると、造寺司や修理司などの施設との関連性も示唆され、検出建物群の性格を考える上でのヒントとなりうるものといえる。当該調査地を検討した井上和人氏は奈良時代の建物群については西大寺との関連、平安時代の遺構群については秋篠寺の寺院造営整備に関連するものと考えている（井上 2004）。

修理司が人事面において造西大寺司や造西隆寺司と密接な関係を有していたことを考えると、現代の官公庁の総合庁舎的に三者が近接して設置されていた可能性も考えられるのではなかろうか。

3.　西大寺との関係について

今回の調査で検出した東西方向の築地塀に葺かれていた瓦は、すでに記してきたように「修理□」銘瓦のほか、「西」刻印瓦やさらには側面に布目痕をもつ平瓦など、これまでの西大寺跡およびその周辺

の条坊遺構で出土する奈良時代の瓦と共通する特徴を有している。出土瓦を見るかぎりにおいては、検出した区画施設が西大寺造営と密接に関わっていたものと考えることができる。

西大寺に関しては鎌倉時代（13 世紀）の敷地図のほか、秋篠寺との相論に関する絵図など豊富な古絵図が残されている（佐藤編 2005）。このうち、「西大寺敷地之図」は 13 世紀後半の西大寺周辺の様相を描いたもので、西大寺と西隆寺の寺域に該当する坪が朱線で囲んで三×五町が「寺中」と表記され、周辺の坪には、「寺領」の記載がある。西大寺伽藍の門名と堂舎、堂舎跡は所在地に名称を朱筆で記入している。北辺三坊三坪と六坪の間の西三坊坊間路には「北門」の朱書きがある。今回の調査地に該当する北辺三坊六坪には「寺中」の墨書のほか、「十五所明神」、「修理町」の朱書きがある。なお、「修理町」の朱書きは東西両隣の三坪、七坪にも記されている。

また、同じく 13 世紀後半の西大寺の様相を描いた「西大寺往古敷地図」では西大寺と西隆寺の伽藍の郭が朱線で囲まれ、西大寺伽藍の門名は墨書し、堂舎と堂舎跡は所在地に名称を朱筆で記入している。西大寺伽藍の北に「十五所明神」、北東には「修理所」の記載がある。

今回の調査で奈良時代の「修理□」銘瓦を葺く築地塀の南側の地域が鎌倉時代には「修理町」あるいは「修理所」と記されている点はその関係性を留意すべきであると考える。この修理所に関しては石上英一氏が律家による堂舎造営の機関と考えられており、弘長 3（1263）年宣旨の寺院修造の命令や弘安元（1278）年からの律家堂舎の造営との関連を指摘している（石上 1997）。

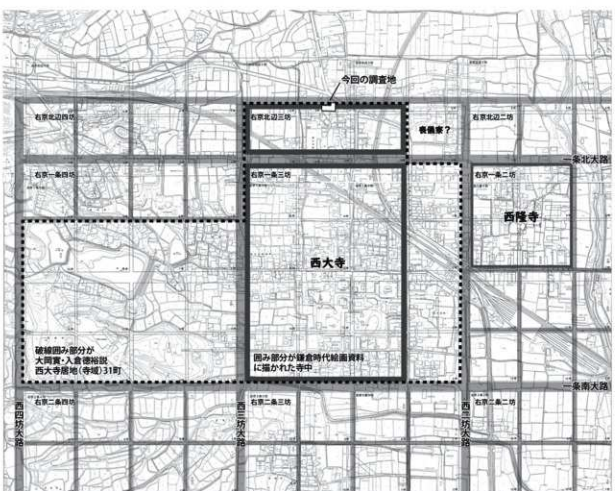


図 29　今回の調査区と西大寺・条坊区画との関係（『平城京条坊総合地図』を改変）

なお、正安４（1302）年に秋篠寺が西大寺との寺領相論をめぐる訴訟審理のために院庁に提出した「西大寺与秋篠寺堺相論絵図」では、先の絵図とは異なり、西大寺の伽藍は一条北大路を挟んで南北に描かれている。「相博地」と記された北側の右京北辺三坊三・六・七坪を囲むように土塁状の描写がみられ、大樹で表現される「十五所神社」との位置関係からみると、絵図で表現された土塁状の高まりは今回の調査で検出した築地塀の痕跡であった可能性が高く、当該箇所に貼られた付箋には「仍旧築地、于今現在之由」とあり、発掘調査で得られた考古学的事実とよく符合しているといえる。

ただし、西大寺の寺域に関しては、古絵図群がいずれも鎌倉時代であることから、創建段階とは 500 年近くの時期差があり、これをそのまま創建当初に遡らせることは問題が多いとの指摘もある（舘野 2005）。

奈良時代の西大寺寺域に関しては宝亀 11（780）年の『西大寺資材流記帳』に記された居地 31 町をめぐって様々な見解が提示されているが、今回の調査で検出した条坊区画、すなわち北辺坊の南行を北限とする考え方も古くから提示されており（大岡 1934）、近年では北辺坊一行説を提唱する入倉氏が大岡説をもっとも整合性の高いものとして、ここに西大寺寺域の北限を置いている（入倉 2020）。

このようにみると、今回の調査で検出した東西方向の条坊区画は西大寺寺域の北限を画するものと考えることもでき、出土瓦から導かれる西大寺との親近性とも矛盾はしない。

しかし一方で、「西大寺与秋篠寺堺相論絵図」では、右京北辺三坊三・六・七坪は西大寺主要伽藍とは一条北大路を挟んで、独立した空間として描かれ、鎌倉時代には秋篠寺との間で相論の対象となっている。また、『西大寺資材流記帳』には、この区画に該当する記載が見いだせない（山口 2005）。

奈良時代の西大寺を俯瞰すると『西大寺資材流記帳』に記される主要伽藍は一条北大路の南側の三×四町の区画で完結することに異論はなく（宮本 1983、奈良文化財研究所 2007）、東西に並ぶ西隆寺の伽藍とは北辺を揃えた計画性を窺うこともできて納まりがよい。こうなると、やはり一条北大路を挟んだ北側一×三町分の築地塀で囲まれた独立区画の性格が気になるところである。これについては先に記したように、「修理□」銘瓦の出土から修理司関連の施設が設置されていた可能性を指摘したところであり、これこそが、鎌倉時代に秋篠寺との間で相論にいたる所以ではないかと憶測する。

造東大寺司に関しては大同２（807）年から承和５（838）年までの間に「造東大寺所」と改名され、規模を縮小する。さらに、天喜４（1056）年、同５（1057）年、康平元（1058）年などに作成された「東大寺修造用途注進状」にみえる「修理所」は造司、造司所の改称であるとされ、これらは官営から寺営となった営繕機関であるとする（山本 1960、堀池 1994）。

東大寺と西大寺では、平安時代以降の盛衰が異なり、単純に比較することはできないが、鎌倉時代の絵図の西大寺寺中の「修理所」がもとは官営の機関であった可能性も示唆される。修理司や西大寺・西隆寺に関わる造寺司が官営での役目を終えた後、寺営の営繕機関である「修理所」となり、西大寺の寺域に組み込まれた可能性もあるのではなかろうか。

市 322 次調査の平安時代の鋳造遺構をともなう遺構群に関して、井上氏は秋篠寺との関係を指摘するが（井上 2004）、鎌倉時代に西大寺の寺中と記され、「修理所」あるいは「修理町」と記されることを考えると、西大寺の営繕施設として継続的な関係性を示すものである可能性も考えておきたい。

おわりに

調査の総括として項目ごとに記述を進めてきた。多岐にわたる多くの研究成果を十分に咀嚼できておらず、到底上手くまとめられたとは言えない。しかしながら、今回の調査によって北辺坊と西大寺の範囲をめぐる複雑なパズルを解くための重要なピースが姿を現したことだけは事実であるといえよう。

《参考文献》

石上英一 1997「西大寺荘園絵画群の研究」『古代荘園史料の基礎的研究』下　塙書房
五十川伸矢 1986「平瓦の数量計測法の分析－生産遺跡出土平瓦の場合－」『京都大学構内遺跡調査研究年報』京都大学埋蔵文化財センター
井上和人 2004「平城京右京北辺坊考」『古代都城制条里制の実証的研究』学生社
井上和人 2005「考古学からみた平城京北辺坊について」『平城京右京北辺』（財）元興寺文化財研究所
今泉隆雄 1983「８世紀造宮官司考」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立 30 周年記念論集刊行会
入倉徳裕 2020「京北条里と平城京北辺坊の関係について」『条里制・古代都市研究』第 35 号　条里制・古代都市研究会
岩永省三 2016「正倉院正倉の奈良時代平瓦をめぐる諸問題」『正倉院紀要』38 号　宮内庁正倉院事務所
上原真人 1984 『Ⅱ　平・丸瓦』『恭仁京跡発掘調査報告　瓦編』京都府教育委員会
大岡實 1934『西大寺』『日本建築様式』（『高等建築学』第１巻）常盤書房
小澤毅 2022「平城京と条里の関係について」（『条里制・古代都市研究』第 38 号　条里制・古代都市研究会
京都大学考古学研究会 1982「岩倉踏査報告 5」『Trench 34』
京都大学文学部考古学研究室 1982『丹波岡山窯址』
西大寺 1990『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』
（財）元興寺文化財研究所 2005『平城京右京北辺』
（財）元興寺文化財研究所 2008『平城京右京一条三坊一坪』
佐藤亜聖 2005「平城京右京北辺の調査成果と北辺坊」『平城京右京北辺』（財）元興寺文化財研究所
佐藤亜聖 2009「京北条里と平城京」『元興寺文化財研究所研究報告 2008』（財）元興寺文化財研究所
佐藤信編 2005『西大寺古絵図の世界』東京大学出版会
清水擴 1999「『法勝寺新堂用途勘文案』からみた平安時代後期の仏堂造営」『建築史学』33 巻　建築史学会
神野恵 2013「都城の製塩土器」『塩の生産・流通と官衙・集落』（『第 16 回古代官衙・集落研究会報告書』）奈良文化財研究所
辰口町教育委員会 1985『辰口町湯屋古窯跡』
節野和己 1993「第Ⅱ章　西隆寺の歴史」『西隆寺発掘調査報告書』（『奈良国立文化財研究所学報 52.』）奈良国立文化財研究所
節野和己 2005「西大寺・西隆寺の造営をめぐって」『西大寺古絵図の世界』東京大学出版会
『大日本古文書』第四巻「造東大寺牒」天平勝宝８年８月 14 日
東野治之・今泉隆雄 1976「木簡からみた西隆寺造営」『西隆寺発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所
奈良県立橿原考古学研究所 1994『平城京右京一条北辺二坊三坪・四坪』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 67.』）
奈良国立文化財研究所 1984『平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告』
奈良国立文化財研究所 1987『平城京左京四条二坊一坪』
奈良国立文化財研究所 1991『平城宮発掘調査報告 13』
奈良国立文化財研究所 1993『平城宮発掘調査報告 14』（『奈良国立文化財研究所学報 51.』）
奈良国立文化財研究所 1993『西隆寺発掘調査報告書』（『奈良国立文化財研究所学報 52.』）
奈良文化財研究所 2007『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』
奈良市教育委員会 1996『平城京右京一条北辺三坊七坪の調査第 322 次』『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成７年度』
奈良市教育委員会 2001「平城京右京一条北大路・西三坊大路の調査 第 430 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成 11 年度』
奈良市教育委員会 2008「平城京跡（右京北辺四坊三坪）の調査 第 532 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成 17（2005）年度』
奈良市教育委員会 2010「平城京跡（右京北辺四坊二坪）の調査 第 584 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成 19（2007）年度』
奈良市教育委員会 2011「平城京跡（右京北辺三坊六坪）の調査 第 618 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成 20（2008）年度』
奈良市教育委員会 2013「西大寺旧境内発掘調査報告書Ⅰ－西大寺旧境内第 25 次調査－（『奈良市埋蔵文化財調査研究報告』３）
奈良市教育委員会 2021「平城京跡（右京北辺三坊六坪）の調査 第 728 次」『奈良市埋蔵文化財調査年報　平成 30（2018）年度』
西川廉行 1977「出土した瓦片の、計測による一試行」『春日太社奈良朝築地遺構発掘調査報告』春日顕彰会
花谷浩 1991「第Ⅳ章考察１屋根瓦ＡⅡ軒平瓦の変遷」『平城宮発掘調査報告 13』奈良国立文化財研究所
浜島一成 1990「中世寺社内造営組織の成立過程について－東寺・高野山・興福寺・賀茂御祖神社・石清水八幡宮の場合－」『建築史学』15 巻　建築史学会
堀池春峰 1994「東大寺造寺所」『平安時代史事典』角川書店
『平安遺文』1228 文書「法勝寺新堂用途勘文案」応徳２年正月
松原弘宣 1978「修理職についての一研究」『ヒストリア』第 78 号　大阪歴史学会
松本修自 1990「西大寺伽藍の変遷」『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』西大寺
森郁夫 1980「平城宮の文字瓦」『奈良国立文化財研究所学報 38　研究論集Ⅵ』奈良国立文化財研究所
宮本長二郎 1983「奈良時代における大安寺・西大寺の造営」『日本古寺美術全集』第６巻
山口英男 2005「『西大寺資材流記帳』の書写と伝来」『西大寺古絵図の世界』東京大学出版会
山本栄吾 1960「東大寺の営繕用間について」『日本建築学会論文報告集』第 66 号　日本建築学会

関連資料

図 30　検出遺構配置略図
表３・４　報告遺物一覧（1）・(2)
表５～８　検出遺構および出土遺物一覧（1）～（4）

図 30　検出遺構配置略図（S=1/200）

表 3　報告遺物一覧（1）

報告番号	挿図	写真図版	出土遺構 層位	種別 器種	口径（長）	器高（幅）	底径（厚）	残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
1	図 17	図版 15	SD010 ⑤	瓦 丸瓦	(21.1)	17.7	8.2		粗 ～ 5mm 石英・長石・クサリ礫	良 灰 N6/0	線刻「修理□」
2	図 17	図版 16	SD010 ⑤	瓦 丸瓦	(27.2)	(9.0)	8.1		粗 ～ 5mm 石英・長石	不良 灰白 N8/0	刻印「西」
3	図 17	図版 16	SD010 ⑤北壁	瓦 丸瓦	(17.1)	(16.4)	7.0		粗 ～ 8mm 石英・長石・チャート・黒色粒	不良 灰 N4/0	
4	図 18	図版 17	SD010 ③	瓦 丸瓦	37.0	16.8	9.0		粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫	不良 灰白 10YR8/1	
5	図 18	図版 17	SD010 ⑤	瓦 丸瓦	(25.5)	(17.7)	(7.7)		粗 ～ 5mm 石英・長石	不良 灰 N5/0	
6	図 19	図版 18	SD010 ⑤北壁	瓦 平瓦	(27.6)	29.1	6.8		粗 ～ 5mm 石英・長石	不良 灰白 N8/0	
7	図 19	図版 18	SD010 ⑤	瓦 平瓦	(26.6)	27.5	8.0		やや粗 ～ 7mm 石英・長石・チャート	良 灰 N4/0	
8	図 20	図版 19	SD010 ⑤	瓦 平瓦	38.4	29.1	7.4		粗 ～ 8mm 石英・長石	不良 暗灰 N3/0	
9	図 21	図版 19	SD010 ⑤	瓦 平瓦	(21.4)	(26.8)	7.7		やや粗 ～ 5mm 石英・長石	良 灰白 N8/0	
10	図 21	図版 20	SD010 ⑤	瓦 平瓦	38.9	29.1	7.1		粗 ～ 5mm 石英・長石・チャート	不良 灰 N6/0	
11	図 22	図版 21	SD010 ④	瓦 平瓦	(21.6)	(20.3)	4.5		やや粗 ～ 5mm 石英・長石	不良 灰 N4/0	
12	図 22		SD010 ⑤	瓦 平瓦	38.2	(19.2)	6.5		粗 ～ 10mm 石英・長石・チャート	不良 灰 N4/0	
13	図 23	図版 20	SD010 ⑤北壁	瓦 平瓦	37.9	(20.7)	7.3		やや粗 ～ 5mm 石英・長石・クサリ礫・黒色粒	不良 灰白 N7/0	
14	図 23	図版 21	SD010 ⑤北壁	瓦 平瓦	38.1	13.8	6.4		粗 ～ 7mm 石英・長石	良 灰白 N7/0	
15	図 23	図版 21	SD010 ⑤	瓦 平瓦	(11.3)	(7.6)	(5.0)		粗 ～ 3mm 石英・長石	良 灰 N6/0	
16	図 23	図版 21	SD010 ⑤下層	瓦 平瓦	(12.8)	(8.6)	(5.8)		やや粗 ～ 2mm 石英・長石	良 灰 N5/0	
17	図 24	図版 21	SD010 ⑤下層	瓦 平瓦	(13.9)	(8.4)	(5.8)		やや粗 ～ 5mm 石英・長石	良 灰 N6/0	
18	図 24		SD010 ⑤北壁	瓦 平瓦	(9.7)	(6.2)	(5.0)		やや粗 ～ 3mm 石英・長石	良 灰 N4/0	
19	図 24	図版 21	SD010 ⑤北壁	瓦 平瓦	(6.4)	(7.5)	(5.0)		やや粗 ～ 2mm 石英・長石	良 灰白 N7/0	
20	図 24	図版 21	SD010 ⑤下層	瓦 平瓦	(7.3)	(10.9)	(5.9)		やや粗 ～ 5mm 石英・長石	良 灰 N4/0	
21	図 24	図版 21	SD010 ⑤下層	瓦 平瓦	(13.9)	(15.2)	7.1		やや粗 ～ 3mm 石英・長石	良 灰白 N8/0	
22	図 25	図版 22	SD010 ⑤下層	瓦 熨斗瓦	35.9	13.6	3.4		やや粗 ～ 5mm 石英・長石・チャート	不良 灰白 2.5Y7/1	
23	図 25	図版 22	SD010 ⑤北壁	瓦 熨斗瓦	22.2	12.4	3.1		やや粗 ～ 3mm 石英・長石・雲母	不良 灰白 N7/0	
24	図 25		SD010 ⑤北壁	瓦 熨斗瓦	(15.6)	9.2	2.5		やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	不良 灰白 N8/0	
25	図 26	図版 23	SD010 ⑤下層	瓦 面戸瓦	15.7	13.2	6.3		やや粗 ～ 3mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N6/0	
26	図 26		SD010 ⑤北壁	瓦 面戸瓦	(9.5)	(8.2)	7.0		密 ～ 2mm 石英・長石	不良 灰 N4/0	
27	図 26	図版 23	SD010 ⑤北壁	瓦 面戸瓦	(7.1)	(11.5)	6.8		密 ～ 2mm 石英・長石	不良 灰 N5/0	
28	図 26		SD010 ⑤北壁下層	瓦 面戸瓦	(7.0)	(5.7)	2.0		やや粗 ～ 4mm 石英・長石	不良 灰 N5/0	
29	図 26		SD010 ⑤北壁	瓦 面戸瓦	(8.4)	(9.5)	(2.5)		やや粗 ～ 2mm 石英・長石	不良 灰 N5/0	
30	図 26	図版 23	SD010 ⑤北壁	土製品 埴	(4.5)	(8.3)	(4.5)		粗 ～ 4mm 石英・長石・クサリ礫	不良 浅黄橙 7.5YR8/4	
31	図 27	図版 23	SK020	須恵器 杯	＊	(0.9)	＊	体部片	密 ～ 2mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N7/0	
32	図 27	図版 23	SK020	須恵器 杯	＊	(2.8)	＊	底部片	密 ～ 3mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N7/0	杯 B
33	図 27	図版 24	SP160 埋土上層	土師器 甕	＊	(8.0)	＊	体部片	粗 ～ 4mm 石英・長石	不良 にぶい橙 7.5YR7/3	
34	図 27	図版 24	包含層 (地山直上)	瓦 軒丸瓦	(2.7)	(9.0)	(6.8)		粗 ～ 3mm 石英・長石	不良 暗灰 N3/0	6236 型式 A 種

表 4　報告遺物一覧（2）

報告番号	挿図	写真図版	出土遺構 層位	種別 器種	口径（長）	器高（幅）	底径（厚）	残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
35	図 27	図版 24	包含層（地山直上）	埴輪 円筒埴輪	＊	－（3.1）	＊	突帯部片	粗 ～ 4mm 石英・長石・チャート	不良 浅黄橙 7.5YR8/3	
36	図 27	図版 24	包含層（地山直上）	須恵器 甕	（21.3）	－（4.1）	＊	口縁部片	密 ～ 2mm 石英・長石	良 灰 N6/0	
37	図 27	図版 24	包含層（谷部）	須恵器 甕	＊	－（4.4）	＊	口縁部片	密 ～ 3mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N7/0	櫛刷あり
38	図 27		包含層（谷部）	土製品 製塩土器	＊	－（2.3）	＊	体部片	粗 ～ 3mm 石英・長石	良 橙 2.5YR6/6	
39	図 27		包含層（谷部）	土製品 製塩土器	＊	－（2.9）	＊	体部片	粗 ～ 5mm 石英・長石	良 橙 5YR7/8	
40	図 27		包含層（谷部）	土製品 製塩土器	＊	－（4.1）	＊	体部片	粗 ～ 5mm 石英・長石	不良 橙 5YR7/6	
41	図 27	図版 24	包含層（谷部）	須恵器 杯	＊	－（2.8）	＊	体部片	密 ～ 2mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N8/0	杯 A
42	図 27	図版 24	包含層（谷部）	須恵器 甕	（8.5）	－（6.0）	1.0	体部片	密 ～ 1mm 石英・長石	不良 灰白 N7/0	内面漆付着
43	図 27	図版 24	灰色粘土（地山直上）	国産陶器 椀	＊	－（5.5）	＊	体部片	密 ～ 1mm 石英・長石	不良 灰白 7.5YR8/1	（釉）灰褐 7.5YR4/2
44	図 27	図版 24	機械掘削（包含層ほか）	須恵器 蓋	＊	－（2.9）	＊	体部片	密 ～ 2mm 石英・長石	良 灰白 N7/0	TK10 型式
45	図 27		機械掘削（包含層ほか）	国産陶器 蓋	（14.4）	－2.4	＊	20%	密 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫	不良 灰白 10YR7/1	
46	図 27		包含層（地山直上）	瓦 平瓦	11.7	－（13.0）	5.7		密 ～ 8mm 石英・長石・チャート	良 灰白 N8/0	

数値の単位は法量 cm

表5　検出遺構および出土遺物一覧（1）

S番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
1	SB070b		ピット			E10
2			ピット		平瓦	E10
3			ピット		土師器（古代）細片、須恵器（古代）甕、丸瓦・平瓦	E10
4			ピット		平瓦	E9
5			ピット		土師器（古代）細片、土師器（中世～）釜、須恵器（古墳時代）高杯・(古代)杯・甕・細片、丸瓦・平瓦	E・F9・10
6			土坑	掘亮		E9
7			土坑	掘亮		E・F8・9
8			土坑	掘亮		E・F7・8
9			溝	掘亮	平瓦	E9・10
10	SD010		溝		土師器（古代）杯・甕・細片、須恵器（古代）杯・壺・甕・蓋細片、緑釉細片、瓦器椀、丸瓦・平瓦、面戸瓦、熨斗瓦・刻印丸瓦・線刻丸瓦、埴	G・H2～5
		上層			土師器（古代）細片、須恵器（古代）細片、丸瓦・平瓦	
		下層			須恵器（古代）杯・壺・甕・蓋・細片、丸瓦・平瓦	
11			土坑	掘亮		E8
12			土坑	掘亮		E8
13			ピット	掘亮		E8
14			ピット	掘亮		E10
15			ピット	掘亮		E9・10
16			ピット	掘亮		E9
17			ピット		須恵器（古代）甕、平瓦	D10
18			ピット	掘亮		D9・10
19			ピット	掘亮		D9
20	SK020		土坑		土師器（古代）杯・甕・細片、須恵器（古代）杯・壺・甕・蓋、瓦器椀、丸瓦・平瓦	F2・3
21			ピット	掘亮		C10
22			ピット	掘亮		C9・10
23			ピット	掘亮		C9
24			ピット	掘亮	瓦細片	E9
25	SB070a		ピット			D・E10・11
26			ピット	掘亮		D・E10
27			ピット	掘亮		D10・11
28			ピット	掘亮		C11
29			ピット	掘亮		D10
30	SB030		建物	S-72・73・74・75・76・77・78・79・81・82		C～E5～7
31			ピット		平瓦	CD9・10
32			ピット	掘亮		CD9
33			ピット		須恵器（古代）壺・甕、平瓦	CD10
34			ピット	掘亮		C9
35			ピット	掘亮		C10・11
36			ピット	掘亮		C10
37			ピット	掘亮		C9・10
38			ピット	掘亮		C9
39			ピット	掘亮		C9
40	SA040		柱列	S-54・56・83		D6・7
41			ピット	掘亮		C9
42			溝	掘亮		D・E8
43			ピット	掘亮		D8
44			ピット	掘亮		C8
45			ピット	掘亮		C8
46			ピット	掘亮		C8

表 6　検出遺構および出土遺物一覧（2）

S番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
47			ピット	掘見		C8
48			ピット	掘見	平瓦	E7・8
49			ピット	掘見		E7
50	SD050		溝			G4
51			ピット	掘見		E8
52			ピット	掘見		D8
53			土坑		土師器（古代）細片、須恵器（古代）甕、平瓦	D7
54	SA040c		ピット		須恵器（古代）細片、丸瓦・平瓦、瓦器椀	D7
55			ピット	掘見		D7
56	SA040b		ピット			D7
57			土坑	掘見		C・D8
58			ピット	掘見		D7・8
59			ピット	掘見		D7
60	SA060	南側部 S-151・152 上面の盛土	築地塀		土師器（古代）細片、須恵器（古代）壺	G4・5
					土師器（古代）細片	
61			ピット	掘見		C8
62			ピット	掘見		C7
63			ピット	掘見		C8
64			ピット	掘見		C8
65			ピット	掘見		C7
66			ピット	掘見		C7
67			ピット	掘見		C7
68			ピット		須恵器（古代）甕、平瓦	C7
69			ピット			C7
70	SB070		建物	S-1・25		D・E10・11
71			ピット			C7
72	SB030f		ピット			E6
73	SB030e		ピット			E6
74	SB030d		ピット			D6・7
75	SB030c		ピット			D6・7
76	SB030b		ピット			CD6
77	SB030a		ピット			C5
78	SB030j		ピット		須恵器（古代）甕	D5
79	SB030i		ピット			D・E5
80				欠番		
81	SB030h		ピット			E5
82	SB030g		ピット			E5・6
83	SA040a		ピット			D6
84			ピット		丸瓦	D5・6
85			ピット			C・D5
86			ピット		平瓦	E4
87			ピット			C5
88			ピット			C5
89			ピット			B5
90			ピット			B5
91			ピット			B5
92			ピット			B5
93			ピット			B5
94			ピット			B5

表７　検出遺構および出土遺物一覧（3）

S番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
95			ピット		土師器（古代）細片、須恵器（古墳時代）細片、平瓦	B・C5
96			ピット			B5
97			ピット		平瓦	B4・5
98			ピット			B4
99			ピット		土師器（古代）細片、平瓦	B4
100			溝		土師器（古代）細片、須恵器（古代）甕、平瓦	B・C2・3
101			ピット			C3
102	欠番					
103			ピット			B3
104			ピット			B3
105			ピット		土師器（古代）細片、須恵器（古代）甕、丸瓦	B3
106			ピット			B3
107			ピット			B3
108			ピット		土師器（古代）細片	B2・3
109			ピット			A・B2・3
110			ピット			F2・3
111			土坑			B2
112			土坑			A2・3
113			溝			A3
114			ピット			A5
115			ピット			A4・5
116			ピット			A4
117			ピット			A4
118			ピット		平瓦	G2・3
119			ピット			G3
120			ピット			E4
121			ピット		平瓦	F4
122			ピット		平瓦	F4
123			ピット		丸瓦	E3
124			ピット			E3
125			ピット		土師器（古代）細片、平瓦	F3
126			ピット		須恵器（古代）甕	E・F3・4
127			ピット		平瓦	E・F3
128			ピット			E3
129			ピット		須恵器（古代）杯、平瓦	E4
130			ピット		瓦質土器甕、平瓦	E4
131			ピット		土師器（古代）細片、丸瓦	E3・4
132			ピット			D・E4
133			ピット			E4
134			ピット			D4
135			ピット			D4
136			ピット			E5
137			ピット			B・C2
138			ピット			E・F3
139			土坑		須恵器（古代）甕、丸瓦・平瓦	E・F3
140			溝		土師器（古代）細片、須恵器（古代）甕、平瓦	G2・3
141			ピット			G2
142			ピット		丸瓦・平瓦	G3
143			ピット		平瓦	E4
144			ピット			E4

表 8　検出遺構および出土遺物一覧（4）

S 番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
145			ピット			E・F9
146			土坑		平瓦	F10
147			ピット			A2
148	SP148		ピット			G4
149	SP149		ピット			G4
150	SP150		ピット			G4
151	SP151		ピット			G4
152	SP152		ピット			G4
153	SP153		ピット		炭	G4
154			ピット			F4
155			ピット		土師器（古代）細片、丸瓦・平瓦	F4
156	SP156		ピット			G5
157	SP157		ピット			G5
158	SP158		ピット			G4
159	SP159		ピット			G4
160	SP160	埋土上層	ピット		土師器（古代）甕、須恵器（古代）甕	G4
161	SP161		ピット			G4
162	SP162		ピット			G4
163	SP163		ピット			G4
164	SP164		ピット			G4
165	SP165		ピット			G4
包含層		床土下の包含層			土師器（古代）甕・細片、須恵器（古代）甕、国産陶器椀、平瓦	
		地山直上			土師器（古墳時代）高杯、土師器（古代）細片、須恵器（古代）（古墳時代）蓋・甕、須恵器（古代）杯・壺・甕・高杯、国産染付細片、軒丸瓦・丸瓦・平瓦、埴輪	
		谷部			土師器（古代）壺・高杯・製塩土器・細片、土師器（中世～）釜、須恵器（古墳時代）提瓶・（古代）杯・壺・甕・蓋、緑釉皿、瓦器椀、国産染付細片、丸瓦・平瓦、埴輪	
		S-10 の上層			須恵器（古代）杯、平瓦	
		S-140 の上面			丸瓦・平瓦	
		（カクラン含む）			土師器（古代）細片、瓦質土器鉢、丸瓦・平瓦	
整地層		地山直上			土師器（古代）細片、須恵器（古代）甕	
地山直上		遺構検出			土師器（古代）高杯・細片、須恵器（古代）杯・甕、平瓦、埴輪	
		灰色粘土			国産陶器天目椀	
		（降雨で露出した遺物）			須恵器（古代）杯・甕、国産青磁細片、丸瓦・平瓦	
側溝（地山直上包含層）					土師器（古代）製塩土器細片、須恵器（古代）杯・甕、丸瓦・平瓦	
北東拡張区地山直上包含層					土師器（古代）細片、須恵器（古代）細片、丸瓦・平瓦	
北東拡張区（旧耕土～地山）					土師器（古代）細片、須恵器（古代）杯・壺・甕、国産白磁椀、平瓦・平瓦（近世）	
機械掘削					土師器（古代）杯・壺・細片・（中世～）鍋、須恵器（古墳時代）杯・蓋・（古代）杯・壺・甕・細片、国産青磁椀、国産白磁椀、国産陶器灯明皿、丸瓦・平瓦・平瓦（近世）鉄滓、埴輪	

写真図版

調査前風景（北東から）

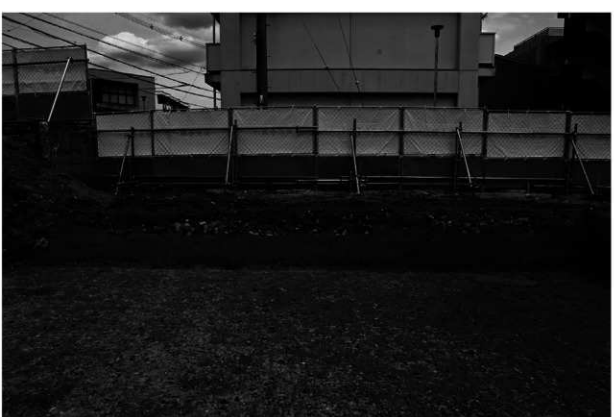
重機掘削状況（北東から）

図版 2

調査地全景（西から）

調査地北東部（西から）

調査地西壁土層断面（東から）



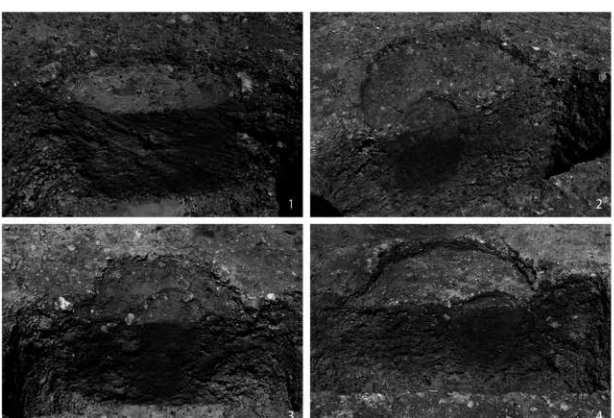
調査地東壁土層断面（西から）

図版 4

調査地南壁西半部土層断面（北東から）

調査地北壁西半部土層断面（南東から）

SB030（北から）



SB030 柱穴断面（1．c：西から、2．a：東から、3．j：東から、4．h：東から）

図版 6

SA060・SD010 検出状況（東から）

SD010 瓦出土状況（北から）

SD010 瓦出土状況（南から）

SD010 瓦出土状況（南東から）

図版 8

SD010 法面ピット列検出状況（東から）

SA060 遺構検出状況（北から）

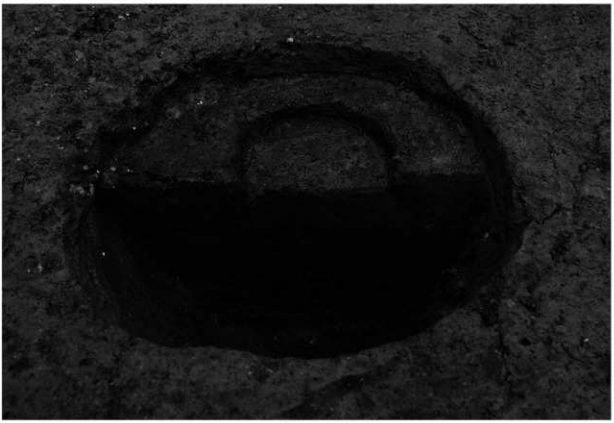
SA060 上面（西から）

SA060 上面（北から）

図版 10

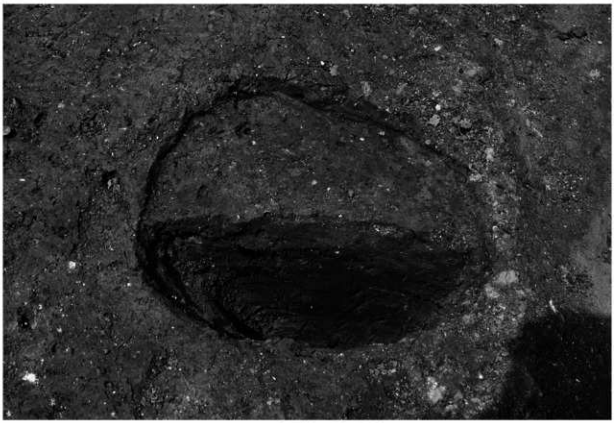
SA060 全景（南東から）

SA060 西側壁面土層断面（東から）



SP152 土層断面（南から）

SP151 土層断面（南から）



SP153 土層断面（東から）

SP158 土層断面（東から）

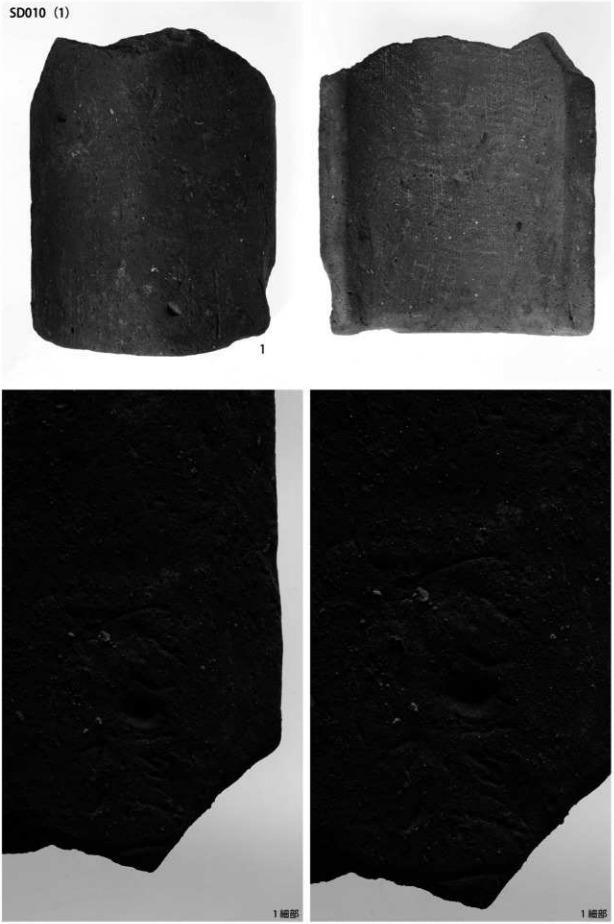
SP160 遺物出土状況（東から）

SD050 土層断面（南から）

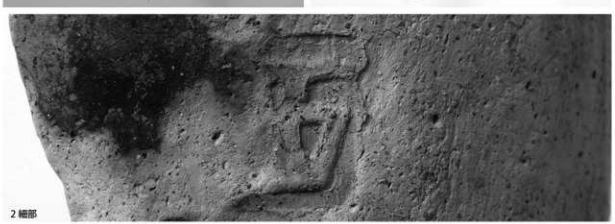
SA060 完掘状況（西から）

SA060 下層検出遺構（北から）

SD010（1）



図版 16



SD010（4・5）

SD010（6・7）

SD010（8・9）

8

8 細部

8 細部

9

9 細部

9 細部

図版 20

SD010（10・13）

SD010（11・14～17・19～21）

11

14

15

16

17

19

20

21

SD010（22・23）

22

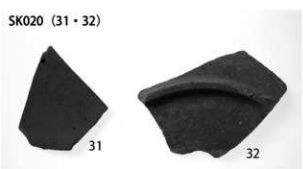
22 縮部

23 縮部

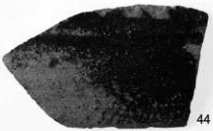
23

SD010（25・27・30）

SK020（31・32）



SP160（33）



包含層（34～37・41～44）

報告書抄録

ふりがな	へいじょうきょうきょうほくへんさんぼうご・ろくつぼ
書　　名	平城京右京北辺三坊五・六坪（HJG18 次）
副 書 名	令和４年度発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	江浦　洋、池本優衣
編 集 機 関	公益財団法人 元興寺文化財研究所
所　在　地	〒630-8392　奈良市中院町 11 番地　　Tel 0742-23-1376
発行年月日	西暦　2024 年 3 月 31 日

ふりがな	ふりがな	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
平城京右京（へいじょうきょうう きょう）北辺三坊五・六坪（ほくへんさんぼうご・ろくつぼ）	奈良市西大寺北町（さいだいじきたまち）１丁目（ちょうめ）	29101		35° 59′ 55″	135° 59′ 59″	20220606 ～ 20220726	452㎡	集合住宅建設

種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
集落跡 都城跡	古墳時代 奈良時代	掘立柱建物 掘立柱列 築地塀 溝 ほか	土師器 須恵器 瓦	東西方向の条坊区画を検出 「修理□」とヘラ書きされた丸瓦が出土

要　　約	全体に遺構密度は希薄であるが、掘立柱建物跡や条坊区画である築地塀とそれに伴う溝を検出した。掘立柱建物跡は出土遺物はないものの、周辺の調査で検出されている古墳時代の掘立柱建物跡と軸線が共通すること、周辺から古墳時代の遺物が出土することから、古墳時代のものと推定している。奈良時代の検出遺構は調査区北端で検出した東西方向の条坊関連遺構である。東西方向の築地塀の痕跡とその北側で平行する溝を検出している。溝からは築地塀に葺かれていたものと考えられる瓦が一括で出土した。出土した丸瓦の１点には「修理□」とヘラ書きされたものが含まれており、西大寺・西隆寺の造営と関係が深い「修理司」との関連が想起される。ほかに「西」の刻印をもつ丸瓦、側面に布目痕をもつ平瓦も多く、西大寺との関連が想定される。検出された条坊区画は一条北大路から北に約 138 m であり、おおむね条坊の一町分の距離に相当する。北辺坊の調査において明確な形で検出された東西方向の条坊区画である。

平城京右京北辺三坊五・六坪
（HJG18 次）
－令和 4 年度発掘調査報告書－

2024.3.31

（発行・編集）公益財団法人　元興寺文化財研究所
（印刷）株式会社　明新社